

創基 200 周年

山口大学の

来た道

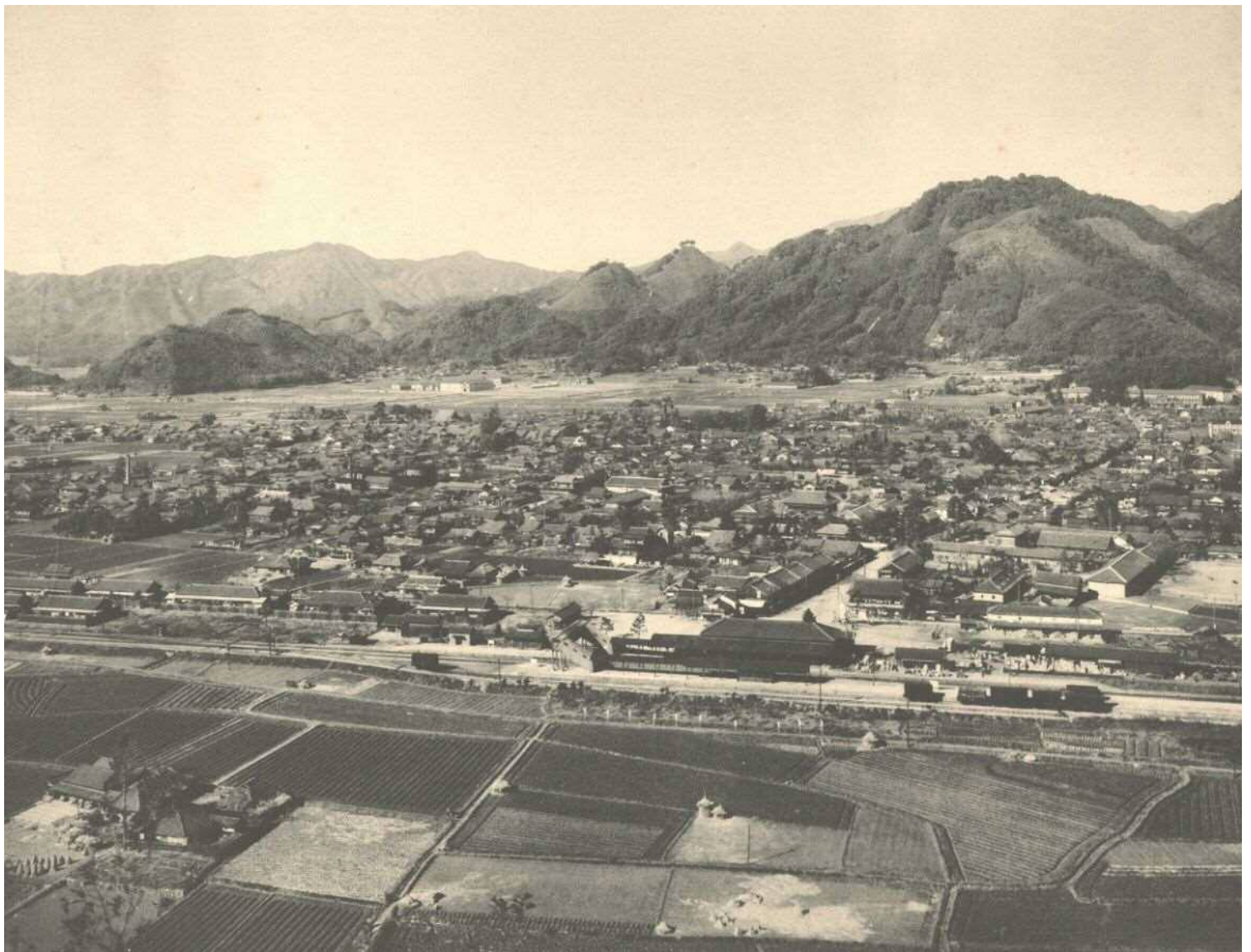
3

目次

- 1 山口高等商業学校成立
- 21 山口高等学校の再興
- 33 山口県師範学校
- 45 農業教育の発展
- 49 獣医教育の再興
- 55 工業教育の芽生え
- 63 医学教育の芽生え
- 69 混乱の時代を経て、そして...
- 71 年表・参考資料

山口高等商業学校から

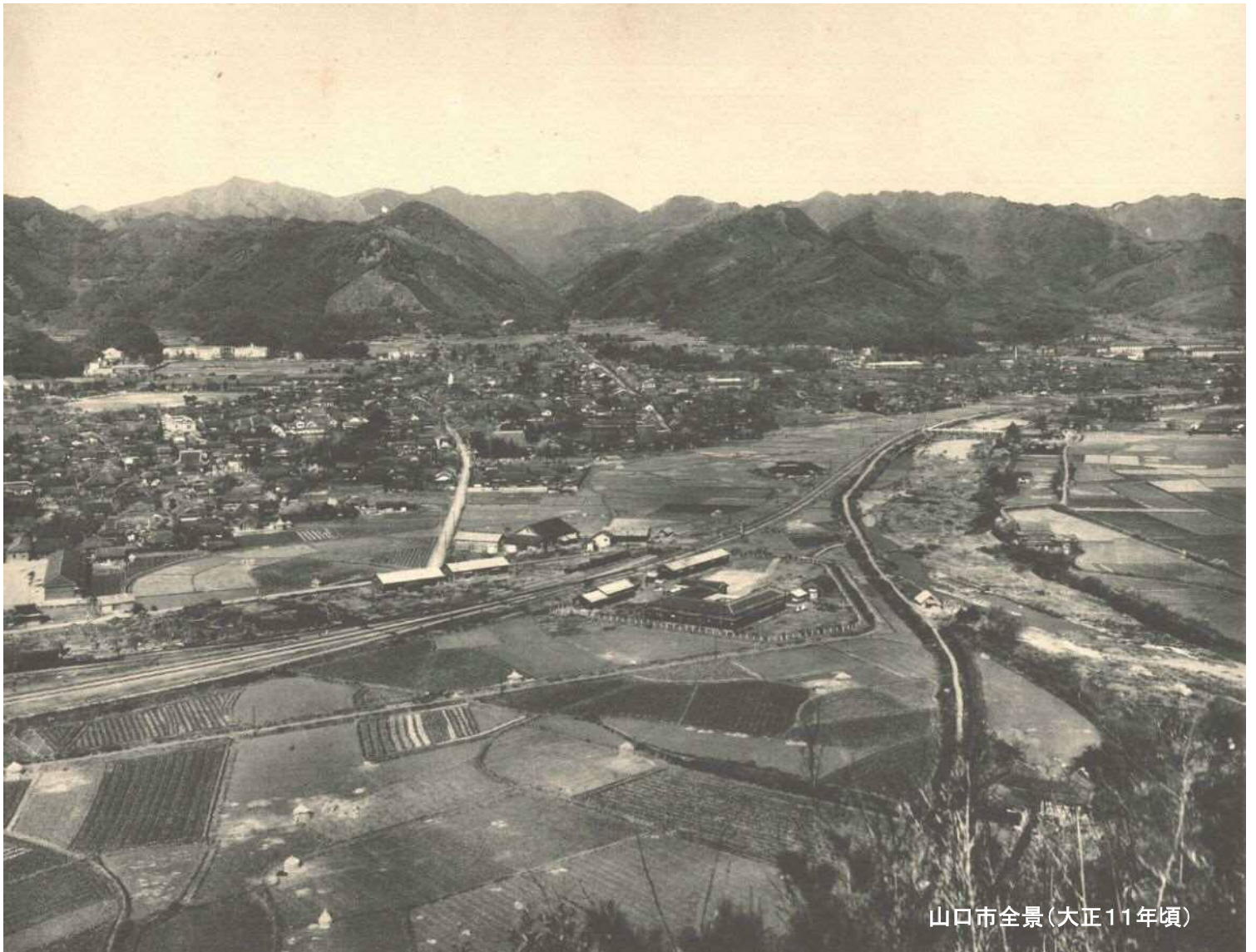
専門学校誕生まで



日清戦争、日露戦争を経て日本は列強国としてその地位を固めていった。そして第一次世界大戦を契機に、国内の社会構造は大きな変貌を遂げた。農業に代わって工業が主要産業として台頭し、急速な経済成長の影響は教育にも波及した。

人材育成のために実業教育に重点が置かれるようになり、国内には多くの実業専門学校が誕生した。山口県でも商業学校、工業学校が新設され、既設の学校の発展とあわせて、教育環境はさらに充実していった。学生たちはそれぞれの学び舎で、それぞれの青春を謳歌した。

やがて第二次世界大戦がはじまり、戦況が悪化するにしたがい、学校は本来の機能を果たせなくなり、学園生活は混乱を余儀なくされた。



山口市全景(大正11年頃)

# 山口高等商業学校成立

## 旧旧山高からの転換

山口講堂以来約90年間、中学校、高等中学校、高等学校と比較的順調な歩み続け、常に新しい教育制度の先頭に立ってきた官立山口高等学校(以下「旧旧山高」という)は、明治30年代後半に大きな転換期を迎えた。

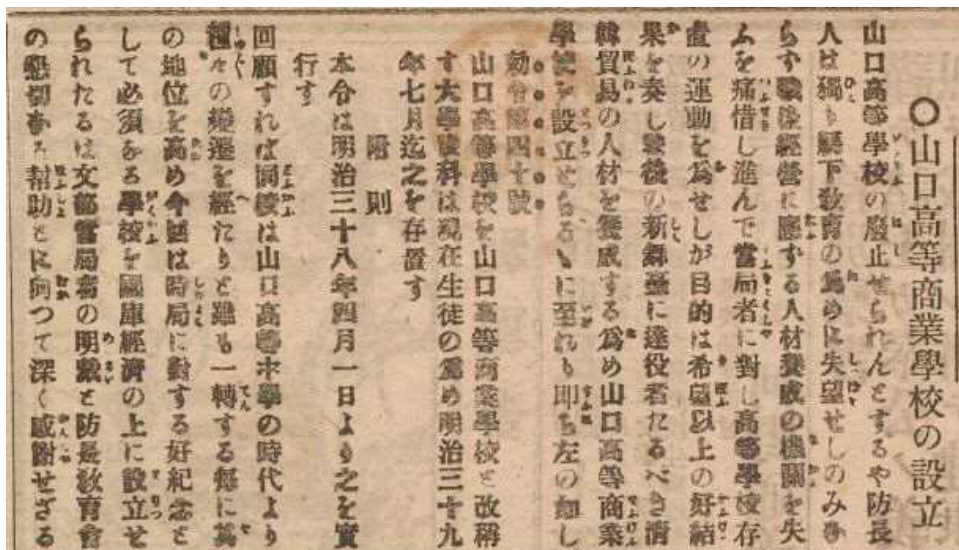
全国的な高等教育熱の高まりにともない、文部省が入学制度の統一を図ったため、旧旧山高には県外からの入学生が急増した。発足時に過半数を超えていた県内出身者は、明治37(1904)年には全体の2割まで落ち込み、設立の際の「県民のための高等教育機関」という主旨に合わなくなった。また、学生数増加は運営費を負担していた防長教育会の財政問題にも大きな影響を与え、さらに校舎修繕や改築などの多大な出費が見込まれたことから、同会では将来計画に苦慮し、旧旧山高の国庫移管を文部省に申請した。

一方、国内では日清戦争後の産業界の驚異的発展にともなって、各種産業に科学的知識や技術を有する人材の供給が急務となり、実業教育振興の機運が熟していた。相次いで各種実業学校が設立され、明治36年には「専門学校令」が制定された。

旧旧山高の国庫移管について紆余曲折の末、政府は実業専門学校の配置計画と大陸に近い山口県の地理的関係とを考慮し、その校種を「高等商業学校」に変更することを明治37年10月に閣議決定した。これを受けて、防長教育会では同校に属する土地、建物など一切の財産を寄附し、3年間は維持費等9万5千円の寄附を確約し、協議が成立した。こうして旧旧山高は防長教育会の手を離れ、官立山口高等商業学校となった。



旧旧山高から引き継いだ校舎本館



山口高等商業学校の設立を伝える新聞記事(「防長新聞」明治38年2月28日)

## 官立で全国3番目

明治38(1905)年4月、山口高等商業学校(以下「山口高商」という)は、東京高商、神戸高商に次いで日本で3番目の高商として誕生した。

同じ明治38年誕生の長崎高商より一足早かったわけだが、全国で3番目にできた高商ということが山口高商生の誇りであり、名声を高らしめる大きな要因であった。

日露戦争も終結近く、国を挙げて戦後経営の必要性が増す中で、この高商への転換は重要な意義を有し、山口高商の使命も大なるものがあつた。

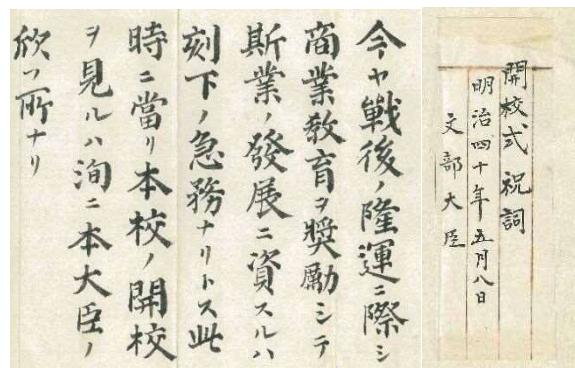
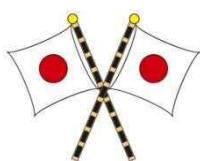
東京高商	明治20年
神戸高商	同35年
<b>山口高商</b>	<b>同38年4月</b>
長崎高商	同38年9月
小樽高商	同43年
台北高商	大正 8年
名古屋高商	同 9年
福島・大分高商	同10年
彦根・和歌山・京城高商	同11年
横浜・高松高商	同12年
高岡高商	同13年
大連高商	昭和16年

官立高等商業学校と設立年

## 町を挙げての歓迎

開校式は、明治40年5月8日に挙行された。5月8日は明治38年に第1回の入学式を行った日で、この日をもって開校記念日と制定した。防長教育会会長、山口県知事ほか130余名の来賓を迎え、午後3時から式を開始。

正門は若葉のアーチで飾られ、夜はイルミネーションが校舎を浮き上がらせ、花火が打上げられた。午後7時から、職員生徒に来賓を加え、高商の二文字を描いた提灯を手に4時間に及ぶ市内行列を行った。一時は廃校の危機に直面した旧山高が、一転して高商という時代の花形に生まれ変わったことで、地元の喜びもひとしおだった。



文部大臣の祝辞(抜粋)



開校式記念撮影

# 目指すは実業教育

## 4 力条の教育方針

開校式の式辞で、松本源太郎初代校長は山口高商の教育方針を述べている。

- 第一 高等商業学校トシテノ本校ハ徒ラニ深遠ナル空理ニ馳セス実際ニ重キヲ置クヘシコト
- 第二 成ルヘク少年ノ中ニ高等商業ノ教育ヲ了ヘ実業ニ就カシムヘシコト
- 第三 本校ノ卒業生ハ成ルヘク滿韓地方ノ実業ニ従事セシムル目的ヲ以テ教育スルコト
- 第四 徳育ニ重キヲ置クコト

このうち、第1と第3の項目が注目される。日露戦争後に予想された「満韓経営」の重要化と人材養成の必要から、「満韓」に直近の山口に高商を設置し、時代の要請に応えようとした国策が見て取れる。

大学予科から専門学校へと大きく舵を切った山口高商は、ビジネス・リーダー養成に向けて体制を整えることとなった。



松本源太郎校長

## 特徴的な授業科目

明治38(1905)年2月27日、「山口高等商業学校規程」が定められ、授業科目が決定した。高等学校時代と比較すると、教育方針の変革は一目瞭然である。

旧山高 (明治33年)	各部共通	倫理、国語、英語、ドイツ語、ラテン語、数学、物理、体操
	第1部 法・文	歴史、論理及心理、法学通論、経済通論
	第2部 工・理・農	化学、動物及植物、地質及鉱物、図画、測量
	第3部 医	化学、動物及植物
山口高商(明治38年)		倫理、書法及商業文、応用物理学、英語、商業算術、商業地理、簿記、応用化学及商品学、経済学、民法商法、商業学・商業実習、第二外国語、体操



### 実践室

山口高商は他の高商に先駆けてタイプライターを導入した

## 教員の任免異動

山口高商への転換により、授業科目は大幅に変更されるとともに、生徒定員が500名から300名に減少した結果、教授定員も半数に減り、教員の更迭という事態となった。

松本校長は、防長教育会からの資金援助を願い、明治39(1906)年7月限りをもって退官する大学予科教員には各人の俸給1年分に相当する酬謝金を支払う一方、商業科教員の任命に奔走した。最終的に旧山高からの残留教員は、横地石太郎教授ただ一人だった。



教官室



横地石太郎教授  
後に第3代校長となった

年次	学校長	教授	助教授	書記	備考
明35.3.27	1	20	3	6	旧山高時代(大学予科)
39.3.30	1	18	3	6	大学予科3年生+山口高商1年生
<b>39.7.12</b>	<b>1</b>	<b>10</b>	<b>3</b>	<b>6</b>	<b>7月3日、大学予科最終卒業 山口高商1、2年生</b>
42.4.6	1	15	5	6	清国留学生部特設
44.3.31	1	16	7	6	45年1月より生徒定員360人に増加

教職員定員の変遷(年次は文部省直轄諸学校職員定員令改正年による)

## 高商発進！

明治38年2月、「山口高等商業学校規程」に続いて同規則が制定された。



開校時帽章

- 修業年限 3年
- 生徒定員 300人
- 授業料 年額25円
- 入学資格

品行方正で年齢17歳以上の男子のうち、中学校等卒業生で入学試験及び体格検査合格者

当時の小学校教員初任給  
約2ヶ月分に当たるよ



第1回目の入学試験は4月10日～14日に文部省及び山口高商本校を会場として実施された。募集人員100名に対して応募者250名、このうち101名が入学し、明治38年5月8日、入学式が挙行された。



第1回目生徒募集の広告  
(「防長新聞」明治38年3月4日)

# 実業教育のための設備充実

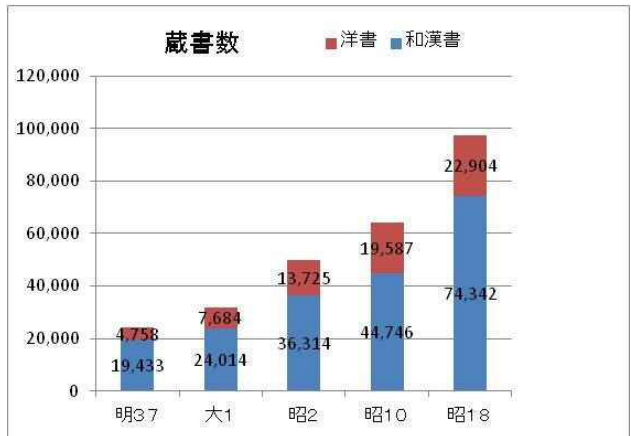
山口高商では、実業教育を実践するにあたり、商業・経済・法律関係の専門書や商品学の標本等を充実する必要が生じた。このための資金は、防長教育会が高商への転換の際の文部大臣との取り決めに基づいて、臨時費2万円を寄附した中から充当された。

さらに、図書増加にともなう書庫の増築、商品陳列所及び商品学講義室の設置など、建物の増改築も必要となり、これもまた防長教育会からの寄附金に負うところが大きかった。

## 図書館



図書館書庫外観



蔵書数の増加

(『山口高等商業学校沿革史』より数字を基に作成)

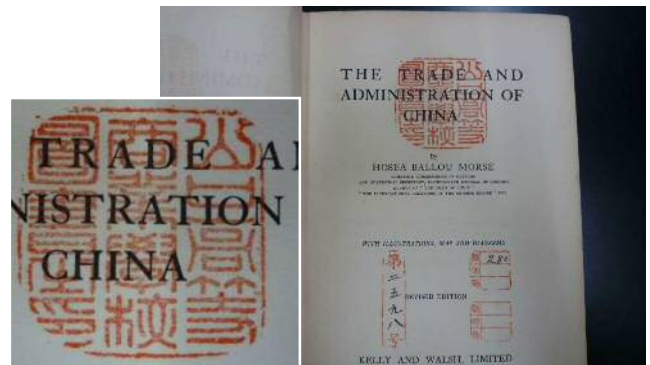


図書館閲覧室



経済学部東亜経済研究所書庫に保存されている当時の図書

当時は海外留学する教官に現金を持たせ、洋書を購入していた。昭和になると卒業生等同窓会関連からの寄贈が急増した。



山口高商の蔵書印



## 商品陳列室

商品学の関連設備を整えるため、旧山高時代の理化学教室を商品学講義室(121.5坪)と商品陳列室(111.5坪)に改造した。商品学担当の横地教授が中心となって商品の収集が促進され、大正4(1915)年末には寄贈分も含めて6,629点(時価13,244円余)の商品標本を揃えることができた。図書の場合と同様に、教官出張の際に商品を購入したり、生徒に対しても旅行で採集した商品や自家の商工見本を寄贈して欲しいと呼びかけ、収集に尽力した。



当時の商品陳列室



### 現在の商品資料館

商品標本は現在も商品資料館に継承されている  
右の黒い建物は東亜経済研究所



# 満韓経営を担う人材養成

大正4(1915)年、日本は中国に二十一カ条の要求を突き付け、中国との経済関係は重要性を増し、中国事情に精通した実業家の育成が重視されることとなった。山口高商創設当初に掲げていた「満韓経営」の地域は支那(中国)へと拡大される。

## 支那貿易科の新設

時局に呼応して、大正5年4月に高商卒業生及びこれと同等の学力を有する者を入学資格者とする修業年限1年の支那貿易講習科(大正7年に支那貿易科に改称)を新設し、対支商業に必須な知識を習得させた。

支那貿易科は昭和14(1939)年には東亜経済研究科と改められ、授業時間の大部分を支那関係の授業が占め、昭和23年まで続いた。

必須科目	授業時間(週)	選択科目	授業時間(週)
支那経済事情	7	英語	2
日支経済関係	2	近世外交史	1
支那最近社会事情	2	農業大意	1
支那最近史	1	(選択科目より、1~2科目を選択する)	支那貿易科の 学科課程 (大正7年)
植民政策	1		
国際法	2		
英語	3		
支那語(中国語)	8		

## 貿易別科の新設

昭和4年には、世界恐慌を背景として、支那だけでなく南アジア・南米の市場開拓が緊急であるとし、中学校卒業生及びこれと同等以上の学力を有すると認められる者を入学資格者とする修業年限1年の貿易別科が新設された。授業科目は、支那語週10時間、馬來(マレー)語2時間を始めとして支那・南洋経済事情など実践的科目を配した。

修業年限が1年と短いため、夏季休暇を利用して室積などの海岸で臨海学校を設けて特訓し、中国及び南洋貿易の第一線で活躍する人材の育成を目指した。



臨海学校の様子

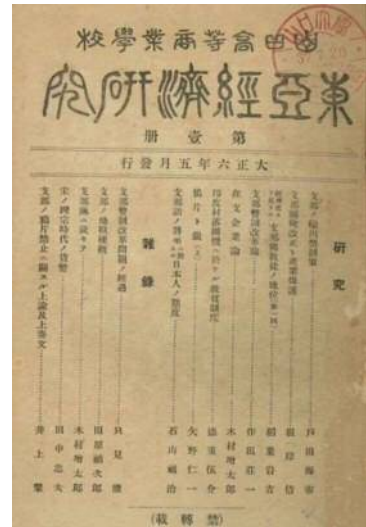
## 支那科の新設

昭和8年には、満州事変の勃発にともない、支那・満蒙で活躍できる人材を養成する目的で、学内予算で本科に支那語専修班(1学級)を新設した。その後、昭和14年に1学級増設と定員増が認められ、2学級の支那科を設立。本科は第1部と第2部(支那科)に分けられた。支那科の授業は、総時間数の4割を東亜関係の文化、社会、経済、財政、金融論などにあてたもので時局色の濃い学科であった。

# 東亜経済研究会

支那貿易講習科の設置にともない、山口高商の東亜経済志向は「実際二重キヲ置ク」ばかりでなく、教育機関としての側面にも重点を置き始めた。大正6(1917)年に東亜経済研究会が設立され、研究資料の収集、研究会、会報と叢書の発刊、講演会の開催などを行った。同年5月、機関誌「東亜経済研究」を創刊。昭和20(1945)年の高商創立40周年記念号で戦前における刊行は終わったが、その間29年の発行は115冊、掲載論文919篇に上る。(その後は昭和32年に復刊し現在に至っている。)執筆者は山口高商教授陣、帝国大学教授、満鉄調査部職員などで、当時の大学を含め時流を代表する最高水準を保持していた。

夏季には、東京や大阪で学界の権威や財界の首脳を講師とした東亜事情講習会を開催するなど、活発な活動を展開した。



東亜経済研究 創刊号

山口高商といえば「東亜経済研究」といわれるほどだった

# 東亜経済研究所の設立

当時盛んだった大学昇格運動に関連して、商業・経済資料の収集・整理・調査を目的とする調査部が大正10年に設置された。昭和元年に調査課となり、「東亜経済研究」、「山口商学雑誌」の編集、刊行業務を担当した。また、図書資料についても管掌した。その後、鷲尾校長が本校内の公設調査機関設立を提唱し、昭和8年に調査課は「東亜経済研究所」となった。当時の実業専門学校における最初の研究所設立である。



鷲尾健治校長

東亜経済研究所は東亜経済研究会と一体となって活動を展開

し、「東亜経済展覧会」の開催、「支那経済年報」の刊行も行った。研究所の収集した図書

資料の種類は次第に増加し、東亜経済に関する文献資料センターの役割を果たすようになっていった。

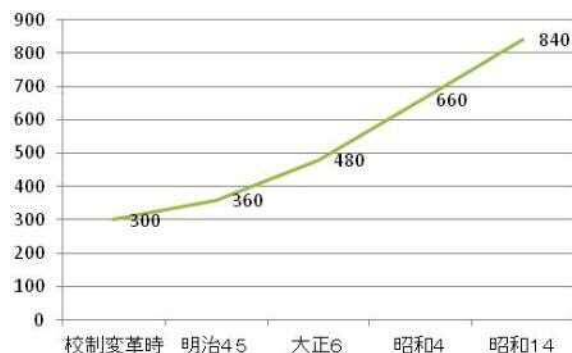
しかし、昭和21年に進駐軍による資料の接收を受け、これをきっかけに東亜経済研究所は閉鎖された。

国・地域	冊数	割合	国・地域	冊数	割合
日本	3361	30.9%	ロシア	237	2.2%
植民地	997	9.2%	欧州	457	4.2%
満蒙	2003	18.4%	北米諸国	172	1.6%
支那	2458	22.6%	中南米諸国	142	1.3%
インド・南洋	293	2.7%	豪州・アフリカ	51	0.5%
東アジア小計	9112	83.7%	国際・世界	437	4.0%
			その他	282	2.6%

東亜経済研究所所蔵図書資料 内訳 (昭和13年)  
所蔵している資料の8割が東アジア関連の資料だった

## 学生定員の増加

山口高商への転換時の生徒総定員は300名であったが、明治45(1912)年に360名、大正6(1917)年に480名へと増加していく。昭和4(1929)年、神戸商科大学が新設され、商大が予科、専門部を置かないために神戸高商の定員を山口、長崎、小樽、名古屋の4高商に配分することとなり、総定員数は660名となった。さらに昭和14年の支那科新設によって840名へと増大した。



学生数の推移  
(『山口大学三十年史』より)

## 外国語の重視

山口高商は外国語を重視した。明治40年の学科課程では毎週授業時間35時間のうち英語が10時間、第二外国語が3時間、合計13時間と外国語の授業が3分の1を占めている。第二外国語は設立当時は清語・韓語から出発し、時勢にともないドイツ語、ロシア語、フランス語、スペイン語などが導入された。



外国語の授業風景

英語・朝鮮語・支那語・ドイツ語には外国人教師が配されていた

## 名物 満韓修学旅行

実業教育の趣旨に基づき、また学校の位置が商工業地から遠いという弱点を補おうと、修学旅行の制度が設けられた。3年生は満韓地方や支那への修学旅行を実施し、1・2年生は内地修学旅行を実施した。3年生の旅行は30日程度の行程で、中国、朝鮮各地の商店や工場を見学し、実業界各方面の講演を聞いた。

外国旅行を行う実業専門学校は他に例がなく、明治40年5月23日から31日間にわたる満韓修学旅行は実に画期的なこととして注目を浴びた。カンカン帽姿での修学旅行は高商名物となった。明治41年には成績考査の細目中に修学旅行という一章を設け、旅行報告書もしくは論文を提出させ、評点を試験点に加えた。

しかし、山口高商の修学旅行は大正12年で終わりを告げた。後年、旧制山口高等学校なども大陸への修学旅行を実施している。

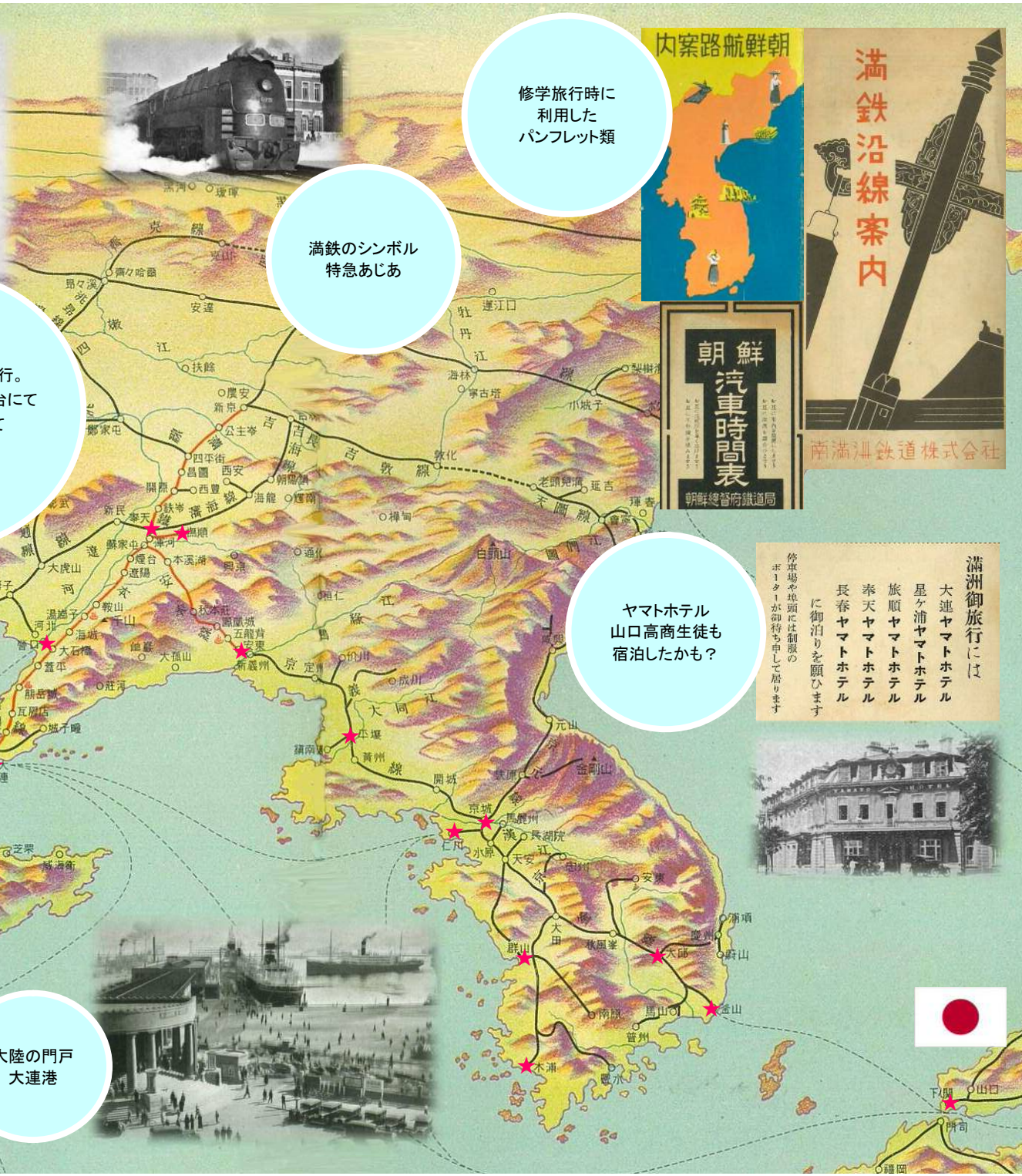




カンカン帽姿の修学旅行。  
 (左上) 旅順松樹山砲台にて  
 (右上) 旅順爾靈山にて  
 (下) 南京にて



生徒撮影の写真  
 (左) 北京天壇公園  
 (右) 北京飯店  
 (現存しているホテル)



修学旅行時に  
 利用した  
 パンフレット類

満鉄のシンボル  
 特急あじあ




ヤマトホテル  
 山口高商生徒も  
 宿泊したかも？

満洲御旅行には  
 大連ヤマトホテル  
 星ヶ浦ヤマトホテル  
 旅順ヤマトホテル  
 奉天ヤマトホテル  
 長春ヤマトホテル  
 に御泊りを願ひます  
 停車場の柱頭には御旗の  
 マスターが御待ち申して居ります



大陸の門戸  
 大連港





## 満韓修学旅行旅程

明治40(1907)年、5月23日から31日間、下関から出発し、釜山・大邱・京城・仁川・大連・旅順・營口・千金寨炭坑・奉天・安東県・平壤・仁川・群山・木浦・釜山をまわった(地図★)。明治44年の第5回までは、この旅程が組まれた。大正元(1912)年には上海・杭州・蘇州・南京・漢口・武昌など初めて支那本土を訪れた。

# 清国留学生の教育

日清戦争以後、清国政府は近代化を図るため、留学生を積極的に日本へ派遣した。山口高商では、「文部省直轄学校外国人特別入学規程」に依拠し、明治40(1907)年4月に初めて6名の清国留学生を受け入れた。明治41年以降は五校特約(※)に基づき、修業年限1年の予科を特設し、予科修了後に本科に進むこととした。卒業生は、有名な銀行家・李銘など実業界で活躍する人材が多かった。

※五校特約とは…

1907年、日清政府間で締結した清国留学生受入に関する協定。主な内容は1908年以降15年間、毎年、日本の官立高等教育機関5校で受け入れ、代償として学生1名につき毎年200～250円の教育費を清国が日本に納めるというもの。受入校と人数は以下のとおり。

- 第一高等学校65名
- 東京高等師範学校25名
- 東京高等工業学校40名
- 山口高等商業学校25名
- 千葉医学専門学校 10名

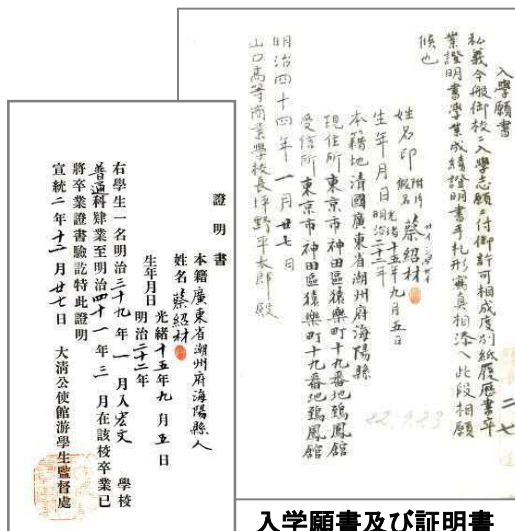
年次	第3学年	第2学年	第1学年	予科	合計
明治40年			6		6
明治41年		3	1	26	30
明治42年	3	1	12	38	54
明治43年	1	9	42	34	86
明治44年	9	19	41	30	99
明治45年	2	4	3		9
大正 2年	4	1			5
大正 3年	1				1

清国留学生数(『山口高等商業学校沿革史』より)

ところが明治44年5月、修学旅行先を巡り留学生と学校の間トラブルが発生したことや、清国における辛亥革命勃発、中華民国成立などの激動により大正期には留学生の数は激減した。

## 満州国留学生

中国人留学生の受け入れ再開は昭和に入ってからとなる。昭和7(1932)年の「満州国」成立を機に、昭和11年に満州人科及び同予科が設置された。この年から留学生は満州国での学力検査を終え、本校に推薦されることになった。日本語が堪能な者は本科の学科を受け、そうでない者は日本語講習会受講生として予備教育を受けた。昭和8年には留学生18名が入学し、その数は年を追って増加し、昭和11年には留学生特設予科の制度が設けられた。この年の留学生総数は83名に達し、「留日学生会山口高商支部」が結成された。昭和14年に山口県と留日学生会の好意により「満州国留学生会館」として、本校内寄宿舎に接した場所に寄宿舎2棟が新築された。また、招待晩餐会や卒業生には送別晩餐会を開き、隣邦学生との親交を深めた。



入学願書及び証明書

# 大学昇格運動

## 昇格か廃校か

大正7(1918)年、「大学令」の公布によって単科大学が認められるようになり、大正9年に東京高商の大学昇格が実現した。東京・広島の両高等師範や神戸高商など5校の大学昇格案が報じられ、長崎高商・小樽高商には専攻科設置という噂が立った。

この動きに山口高商生も鋭く反応し、大正9年11月29日、400名余の生徒が亀山公園に結集し学生大会を開催した。「吾人は本校の昇格を期す」と決議し、「昇格か廃校か」のスローガンの血判状に名前を連ね、旗を押し立てて上田鳳陽の墓に詣でた後、町内をねり歩き、山口町民に訴えた。さらに実行委員10人が決議文を携えて上京した。その後もデモやビラ配りを繰り返し、有力者への協力要請を行った。この最中、数日間授業は休講。生徒側の熱烈な運動に学校側も触発され、「商科大学に昇格し、法学部を併置して総合大学とする」という「防長大学設立趣意書」をまとめて横地校長・鷲尾教授が上京した。

大学昇格運動には、学校・学生・同窓会・県・町・県出身有力者など関係者全員が参加し、東京には期成同盟会が置かれ、県を中心とした運動が展開された。新聞紙上でも運動が報じられ、世間の注目を集めた。



「昇格か廃校か」と書かれた旗を掲げ町内を行進する生徒たち

## 幻となった防長大学

運動は激しさを増し、文部省もその対応に苦慮した結果、大正11年に東京・大阪に工業大学、東京・広島に文理科大学、神戸商業大学の5大学の昇格を認め、山口高商以下16の専門学校に専攻科を設置するとして予算案を議会に提出したが不成立となった。

翌年、専攻科を研究科に変えて議会に提出し承認されたが、関東大震災による財政難で設立は見送られた。昭和4(1929)年になって神戸商業大学などの5大学の設置が行われ、山口高商も大学の新設を目指して運動を継続したが、ついに実らなかった。

運動が激しかっただけに関係者の失意、特に学生の落胆は大きかった。しかし、学生も学校も挫折に打ちひしがれてばかりではなかった。将来的に大学に昇格するため、十分な研究体制を構築するべきとの機運が高まり、学生は自主的に「商学研究会」を結成。続いて、学校の組織的な研究調査機関として「調査部」が発足した。

# 山口高商改称30周年

## 30周年記念祝賀式

昭和10(1935)年に山口高商は改称30周年を迎え、盛大な式典や各種記念事業を行った。講堂では祝賀式が盛大に行われた。来賓には九州帝国大学総長や公爵毛利元昭代理、山口県知事、京都帝国大学法学部長らを招き、参加者は約1,300人にもなった。祝辞や祝電数百通を披露し、改称30周年記念歌を合唱した。10年以上の勤続者に対し表彰状を授与し、鳳陽会からは記念品の贈呈が行われた。

また、松本校長胸像除幕式や対級試合優勝旗贈呈式、プールの竣工式が行われた。

## 慰霊祭・日本経営学会大会

5月8日の開校記念日には、講堂で式典を挙げ、本校関係物故者慰霊祭を野田神社宮司齊主の下に行い、香山墓所に参拝した。同時に上田鳳陽と在職在学中の物故者の追悼会も営んだ。

また、記念行事の一つとして、日本経営学会山口大会を招致開催した。公開講演会や宇部市における「工業統制問題」に関する研究懇談会、本校における「商業学最近の問題」に関する研究報告会を開催した。



慰霊祭

## 各種展覧会

東亜経済展覧会、沿革史展覧会、図書館展覧会、国防展覧会、書道展覧会、ポスター展覧会、土産品展覧会など様々な展覧会が行われた。土産品展覧会では山口市を中心とする名産品を集め、販売も行った。

(右)東亜展のポスター



土産品展覧会



ポスター展覧会



## 記念大運動会・野球リーグ戦

改称30周年記念大運動会は山口高商運動場にて行われた。トラック100m決勝、砲丸投げなど、各種の競技が行われた。趣向を凝らした仮装行列は祝賀気分を盛り上げ、特に2年AB組の「伊江紛争」は大変好評だった。

また、長崎と大分の高商を迎え、三高商の野球リーグ戦を行った。山口高商は一勝一敗の成績で、長崎高商が優勝した。



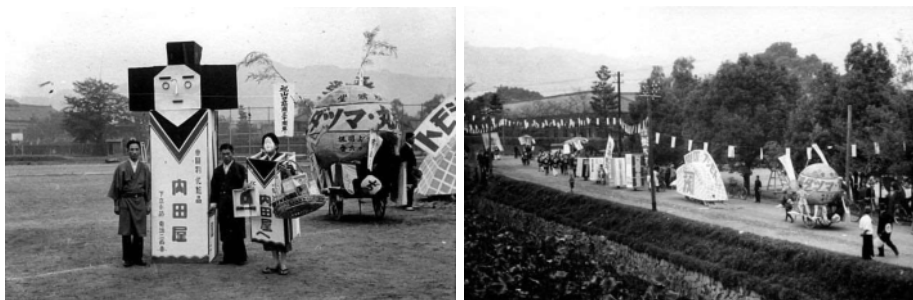
2年AB組による「伊江紛争」

1935年～36年にかけて起きたイタリアとエチオピアの戦争を模した仮装行列

## 提灯行列・広告祭

市内の諸学校や一般市民の参加を得て、提灯行列を行った。市内を行進し、山口高商運動場へ。「祝山口高商三十周年」の煙火があがり大変盛り上がった。

また、山口市商工会は広告祭を挙行し、各種商店の商品を広告する仮装行列の一隊が市民の目を驚かせた。



(上) 広告祭ポスター  
(左) 広告祭の様子

## 大音楽会

東京音楽学校150名の大音楽会が高商講堂で開催され、ピアノ独奏、ピアノトリオ室内楽、ソプラノ独唱、歌合戦序奏などが記念事業の最後を飾った。



大音楽祭の様子

## 記念出版

記念として出版事業も行った。記念論文集や、日本経営学会山口大会による経営学論集「工業統制問題・商業学最近の問題」の出版の他、沿革史編纂のために藩学から現在に至る学事の進展、制度改変の跡を調査し、山口高商の校史を出版した。

『山口高等商業学校沿革史』



# 校舎改築

## 老朽化した校舎

山口高商の校舎は明治18(1885)年の山口中学校時代の建物を引き続き使用していた。建築後30年以上経過しており、教室は陰鬱で「トンネル教室」という異名があった。衛生上の弊害も認められ、徹底的改造の必要に迫られていた。

大正6(1917)年、校舎改築を計画したが、なかなか予算が承認されず、大正15年3月末までようやく第1期計画(教室の改築、講堂、書庫及び図書閲覧室の新築など)が完工した。同年11月以降、第2期・第3期として、本館と正門の改築が行われ、昭和6(1931)年には教室2棟、寄宿舎、柔道場などが新築。職員・生徒の精神修養のための健進館及び弓道場も建築され、その後、商品陳列室、理化学実験教室、雨天体操場の改築・新営が行われた。



改築後の本館(昭和2年3月新築)



現在、経済学部にある商品資料館は、旧亀山校舎の面影を偲ぶものとして、山口高商時代に改築された本館に似せて作られた。屋根のアーチ、門構えなどが似ている？6頁の写真と見比べてみてね！

## 屈指の体育施設 誕生

学友会は、山口高商30周年記念事業の一つとしてプールの新設を決めた。硬式庭球場を運動場に移し、そこにプールを竣工した。固定飛込台やスプリングボードなどを併設し、水中電気照明の設備も備えた。日本水上競技連盟の指示を受けた工事で、短水路プールとしては完璧に近いものだった。周囲に1,000名収容の観覧席が設けられ、総工費は1万数千円(現在の価値では約4,000万円?)に上ったとされている。



プールの竣工式の様子

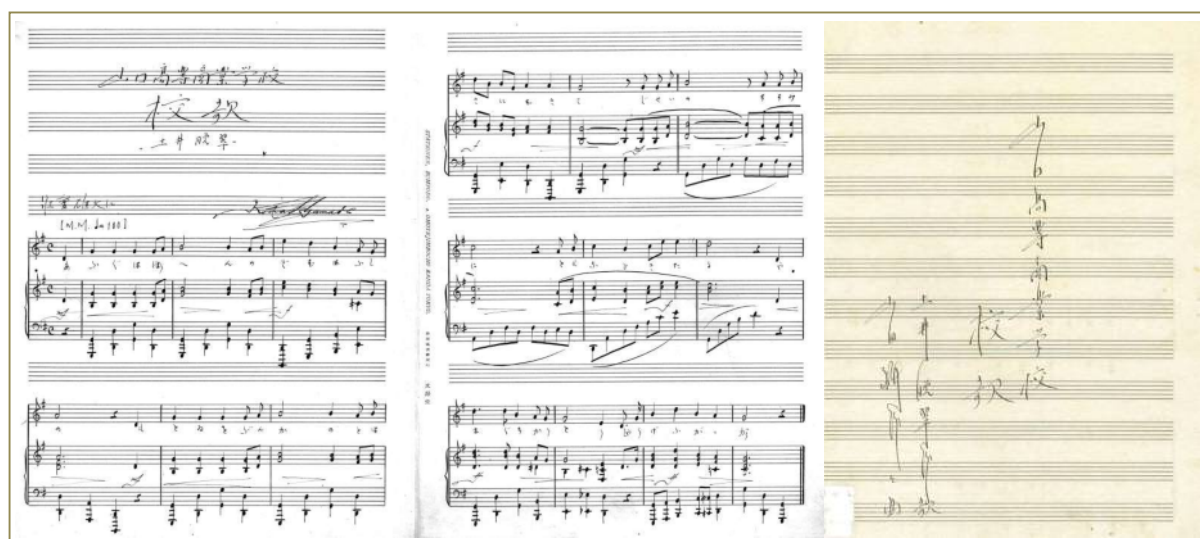
運動場は、昭和11年に隣接の県有地を買収し、生徒の勤労作業・山口中学生の作業援助により昭和13年3月に竣工。一段高くした北側に硬式・軟式庭球、籠球、排球のために10コートを並べ、中央には陸上競技のトラック、ラグビー、アメフト、ホッケーの競技場を配した。南側には野球場、アメフト練習場、東側に跳躍場、土俵、ホッケー練習場を設けた。こうして、全国の高商のなかでは屈指と評される体育施設を備えたのである。

# 山口高等商業学校 校歌

## 校歌の制定



♪仰ぐは鳳翽、臨むは樵野～♪ 山口高商生に愛唱されたこの校歌は、土井晩翠作詞、山田耕筰作曲である。開校25周年に当たる昭和5(1930)年5月18日に「永遠の伝唱」を祈念して発表された。寮歌「花なき山」とともに長く愛唱され、戦後、山口大学経済学部になっても歌われ続けた。



校歌の原稿

土井晩翠 (1871-1952)

詩人、英文学者。滝廉太郎作曲の「荒城の月」の作詞者としても知られ、校歌・寮歌なども多く作詞した。

山田耕筰 (1886-1965)

日本初の管弦楽団を造るなど日本において西洋音楽の普及に努めた。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮も行う。「赤とんぼ」の作曲者。

## 英国人教師 ガントレット

明治40(1907)年に着任し英語及び商業実習を担当したエドワード・ガントレットは、学生から「ガンさん」の愛称で親しまれた。彼の夫人は作曲家・山田耕筰の姉である。

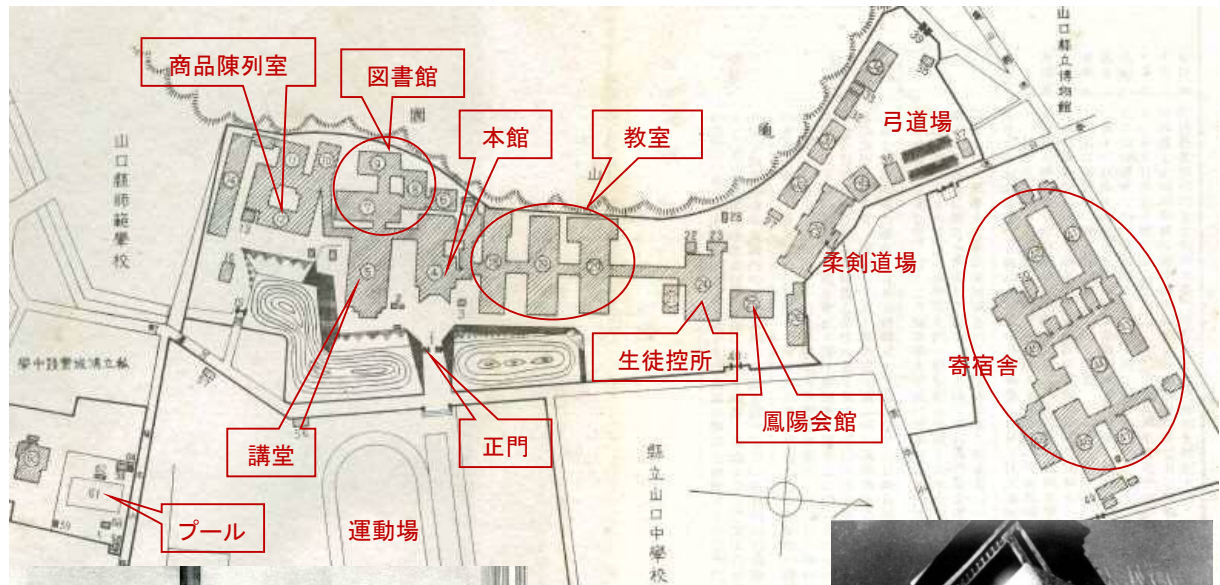
音楽にも秀でていたガントレットは、耕筰の少年時代に西洋音楽の手ほどきをしたと言われ、その縁で校歌の作曲も手がけたといわれる。また、ガントレットは英国王立地学協会に属し、学生達と秋芳洞の学術調査を行い「秋吉台山洞穴略図」を作成した。秋吉台や秋芳洞を世界に紹介し、秋吉台科学博物館には彼の胸像が設置されている。



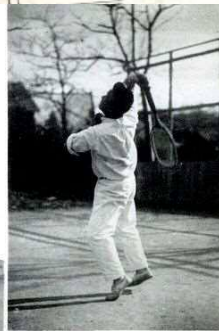
右からガントレット、山田耕筰、ガントレット夫妻の娘、恒子夫人

# 学生生活

昭和14年頃の山口高商平面図。亀山の麓に建つ田舎町の学校ではあったが、学生達は高商生としての誇りを胸に、それぞれの青春を謳歌していた。



ストープ会議(教室)



庭球部



授業の合間にコーヒーを(不二屋にて)



弁論大会(講堂)



自動車練習

# 学友会の発展

明治後期、山口高商への移行期に学友会を構成した部は、邦語講談会、英独講談会、剣術会、柔術会、ベースボール会、ローンテニス会の6部だった。

大正期には、大学昇格運動に触発されて生徒間に自発的研究心が高揚する中で「商学研究会」が結成され、「商学研究会雑誌」が発行された。また、生徒の意見発表機関として「山口高商新聞」も発行された。運動部では、長崎・大分・山口の「三高商戦」が大正13(1924)年に始まっている。

その後、学友会は順調に発展を遂げ、昭和期に入ると部は急速に増えて学友会に所属する部は23部(文化部6、運動部17)にも上った。また、それ以外にも多くの団体が結成され多種多様な活動を展開した。



山口高商新聞



三高商戦



排球部



馬術部



陸上競技部



野球部



籠球部



広告研究会



# 鳳陽寮

寄宿舎も旧山高から山口高商へ引き継がれ生徒訓育の場として重視された。大正11(1922)年に寮生の応募により「鳳陽寮」と名づけられ、寮歌「花なき山」は寄宿舎茶話会歌から「鳳陽寮歌」と呼ばれるようになった。

寮舎は著しく老朽化していたため、昭和4(1929)年に180名収容できる5棟の寮舎と事務室、応接室、閲覧室及び集会場からなる建物を新築、翌年にはテニスコート等の運動施設も充実した。



鳳陽寮(昭和4年3月新築)



南寮

(右)寮生の居室

一部屋に2人~4人が入居していた

(右下)東中寮などはベッドが使用され、当時では画期的だった

(下)浴場



自炊制度は種々の困難に遭遇し、一時請負制度に変えられたが、昭和9年に復活した。また、明治42年から請負制による売店を廃止し、寮生全員からなる組合員の出資をもととする消費組合を設立し、自治制度の充実を図っている。



(上)食堂  
(左)欠食簿

遠征などで食事が不要な時に記載していた

美味しそうなメニューがいっぱいだね。



## 卒業生の就職先

右表は、昭和16(1941)年6月末における卒業生の就職状況である。

商業金融関係への就職率が高いのは当然として、鉱工業については、その企業の経理部門或いは企業会計部門に採用されたものと考えられる。当時の鳳陽会会員名簿によると就職先は三井、三菱、住友など財閥系の企業を始め、旧山高卒業生・鮎川義介率いる日産コンツェルン系列会社などの大企業が名を連ねている。また、南満州鉄道・朝鮮銀行・東洋拓殖などに採用され、朝鮮・中国などいわゆる外地へ赴任した者も多かった。上級学校への進学先は、九州帝国大学、東京商科大学、神戸商科大学などとなっている。

山口高商では、明治41(1908)年の第1回卒業式挙行にあたって同窓会を組織し、昭和2年に「鳳陽会」と改称、昭和5年には



鳳陽館

(亀山の本校跡地の一角に建っている鳳陽会本部事務所)

社団法人となった。卒業生の繋がりは非常に強く、同期生或いは先輩・後輩のネットワークが、就職を有利なものにただけでなく、戦前期における日本企業の発展に影響を及ぼしていた。

なお、鳳陽会は山口大学発足後も経済学部同窓会として引き継がれ、今日まで伝統を連続と伝えている。

種別	人数
商業	576
金融	504
交通	228
保険	101
工業	766
鉱業	154
電気	108
自営	371
官吏・公吏	326
弁護士・計理士	18
教員	288
学生	88
兵役	602
その他	289
無職	174
不詳	244
合計	4,837

卒業生就職状況

(『山口高等商業学校一覧』より)

## 山口経専への改称

昭和18年、大学、高等、専門、中学校令が全面的に改正され、山口高等商業学校規程、規則もこれに準じ、教授要領、修練要領が訓令されて学校の独立性が失われてしまった。

第一学年は全寮制となり、文武一体の生活指導が敷かれた。昭和19年4月から全国の高等商業学校、商科大学から「商業」の呼称が消されることとなり、山口高等商業学校は山口経済専門学校へと改称した。



門標が山口経済専門学校に

# 山口高等学校の再興

## 政府による高等学校新設計画

旧旧山高の廃校後、山口県の大学進学希望者は他県の高等学校に入学しなければならなくなったため、経済的な負担が増大していた。これを見かねた卒業生有志が高等学校再興を度々政府に請願するものの、なかなか見通しが立たない状態が続いていた。

ところが第一次世界大戦後、経済成長にともない高等教育機関への入学希望者が増加し、また優秀な人材を欲する産業界の要求も高まってきた。こうした社会状況に対応すべく、大正6(1917)年、政府は「臨時教育会議」を設け学制改革の検討を始めた。この頃から次第に高等学校新設の計画が具体化し、全国に2校程度の高等学校設立に向けて設立地の選定が始まった。

## 山口県への誘致運動

当時、全国各地で誘致運動が起こり、新潟、長野、山口、愛媛、福岡の5県が有力な候補地となった。

高等学校の誘致には、文部省から設立費の地元負担分として要求された約55万円を工面する必要があったが、大正8年度の県一般会計歳出決算額が約377万円で、そのうち教育費が約43万円であったことから考えると、これは莫大な金額である。しかし、防長教育会を中心とした卒業生有志、毛利氏、山口ゆかりの財界人の支援、山口町の尽力により、これを十分に上回る59万7千円の助成費が集まった。

大正7年4月、設立費用を携えて帝国議会で請願した結果、ついに山口県への高等学校設置が承認された。こうして、政府により新設4校のうちの1校を山口県に設置する案が発表され、正式に山口高等学校（旧旧山高と区別して、この旧制山口高等学校を以下「旧山高」という）の設立が決定したのである。

防長教育会	200,000 円
久原 房之助	80,000 円
藤田 平太郎	80,000 円
藤田 政輔	40,000 円
毛利氏	100,000 円
山口町(敷地用)	60,000 円
山口県予算	37,000 円
計	597,000 円

助成金内訳

## 旧山高設立を支援した財界人

久原房之助

山口高等学校の再興にあたっては財閥からの援助が大きかった。久原房之助は、久原財閥の総帥で、日産コンツェルンの基礎を創った人物である。下松工業高校の設立に際しても寄附を行うなど、県教育の発展に大きく貢献した。藤田平太郎は藤田財閥の二代目総帥。藤田政輔も日本鋳業社長を務めるなど実業家として活躍している。

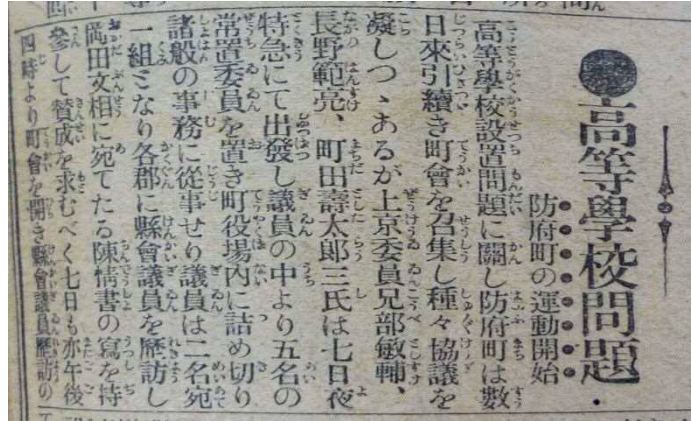




# 山口町と防府町の誘致合戦

山口県への高等学校新設は決定したが、政府案では山口県内に1校新設とあり、山口町に設置とは明言されていない。これを知った防府町は誘致活動を開始。今度は県内で誘致合戦の火蓋が切って落とされたのである。

(右)防府町の運動開始を伝える新聞記事  
 (「防長新聞」大正7年4月6日)



<h2>山口町</h2> <p><b>4月9日</b> 敷地代として約束していた6万円の寄付金が、実際にはまだ用意できていなかったため、町会を招集して対策を練る。</p> <p><b>4月21日</b> 位置は山口町に決定という東京からの電報を受けて準備委員会発足。</p>		<h2>防府町</h2> <p><b>4月5日</b> 町会を招集し、中山町長から高等学校設置を提案。協議の結果、防府町に設置された場合創立助成費として10万円の寄付をすることを決定。</p> <p><b>4月7日以降</b> 岡田良平文相、中川望山口県知事、その他県会議員への働きかけを始める。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



糸米の風景

県としては、防府町の要求を無視できないとして、県会議長が上京して政府と交渉。大正7年(1918)5月3日、三田尻駅頭で防府町長に山口町に確定していることを報告し、事実上、この問題を終結させた。

その3日後の5月6日、臨時県会にて正式に山口町への設置が決定した。山口町には敷地用の寄附金6万円の捻出という難題が残されていたが、これは県が一時的に支出し、5分利付4ヶ年賦で返済することで解決した。

敷地の候補地としては、白石沖・糸米山稜地に近い場所と県庁前の空地が挙がっていたが、決定権は文部省にあったため、文部省から建築課長が来山し、県当局と打ち合わせを行った結果、糸米が設立地として正式に決定した。

# 旧制山口高等学校始動

大正8(1919)年4月、「高等学校令」により、これまで第1から第8までの8校だった官立高等学校は、新たに新潟、松本、山口、松山の4校が加わり、12校となった。

同月、旧山高の初代校長、新保寅次の人事が決定し、文部省内に置かれた創設事務所にて学則等の制定が進められた。

6月、創設事務所が文部省から山口中学校内の仮校舎に移され、新保校長を始め、教授陣が着任し、開校に向けて準備が着々と進む中、7月には入学試験が行われた。

入学試験は身体検査と学科試験があり、学科は7科目の試験が4日間にわたって行われ、669名の受験者から定員160名の入学者が選ばれた。学校敷地は山口県吉敷郡山口町上宇野令糸米(敷地総数約19,000坪)に確保してあったが、入学初年度は校舎も寮も建設途中であったため、仮校舎、代用学生寮で間に合わせた。校舎は、県立山口中学校(現在の山口県立山口図書館)の補習科用校舎を使用し、町内に4か所の代用学生寮が用意された。

こうして、誘致運動に始まった多くの人々の熱意と努力が実り、大正8年9月12日、山口中学校の講堂で第1回生の入学宣誓式が行われ、いよいよ旧山高の新たな歴史が始まったのである。



山口中学校校舎

## 入学初年度の施設

### ■校舎

山口県立山口中学校の補習科用校舎を借用

### ■校長・事務職員の執務室

山口中学校の講堂を借用

### ■運動場

山口中学校・山口高等商業学校から借用



山口師範学校女子部寄宿舍

### ■代用学生寮

- ・下堅小路寮(山口師範学校女子部寄宿舍跡)
- ・太刀売寮(家政小学校跡)
- ・茶臼山寮(元河内信朝氏住宅跡)
- ・荒高寮(山口団扇商会工場移転跡)

※荒高寮はその後、剣道部の寮「磨剣寮」として使用

# カリキュラム

修業年限は3年で、「文科」と「理科」に分かれ、それぞれ「甲類」と「乙類」のクラスがあった。「甲」と「乙」では第1外国語の選択が異なり、前者は英語、後者はドイツ語であった。文科、理科ともに外国語教育に重点が置かれており、これは旧高等学校令による高等学校以来の伝統であった。



化学授業風景

各学科の毎週授業時間数（『山口大学三十年史』より）

文 科	1年	2年	3年	理 科	1年	2年	3年
修身	1	1	1	修身	1	1	1
体操	3	3	3	体操	3	3	3
国語・漢文	6	5	5	国語・漢文	4	2	
(甲)第1外国語(英)	9	8	8	(甲)第1外国語(英)	8	6	6
(甲)第2外国語(独)	4	4	4	(甲)第2外国語(独)	4	4	4
(乙)第1外国語(独)	11	10	10	(乙)第1外国語(独)	10	9	9
(乙)第2外国語(英)	3	3	3	(乙)第2外国語(英)	3	3	3
法制・経済		2	2	法制・経済	2		
数学	3			数学	4	4	4(2)
心理・論理		2	2	心理		2	
自然科学	2	3		物理		3	5
哲学概説			3	化学		3	5
歴史	3	5	4	植物・動物	2	2	(4)
地理	2			鉱物・地質	2		
				図画	2	2	(2)
計	33	33	32		32	32	32

理科の3年生は数学(2)・図画(2)もしくは植物・動物(4)かを選択

## 校章・校歌の制定

校章は、山口中学図画担当の佐治友八教諭が東京美術学校の生徒の作品を改良してデザインした。「堅実不屈」、「進取独立」、「久遠」を表すもの



(上)校章 (右)校歌

一  
健児の胸に燃ゆる火の  
朱こそ映ゆれ朝ぼらけ  
雲の響に眼醒めけむ  
鳳翻山の末遠く  
潮なす麓鉄城に  
こもれる理想誰か知る

として考案された。柏の葉は「堅実」の風アレンジした「山」の字は「武士道精神」を表すとともに、「新月」にも似せてあり、新月が次第に満月に成ってゆくように、積極的な発展を期する意味を持たせてある。

意味を象徴し、兜の鍬型

校歌は、生徒から歌詞を募集したが、当選作が無かったため、国語科の山崎麓教授が応募作から参酌し作詞した。校長及び全教授の校閲を得て大正8(1919)年11月下旬に制定。第1回生の安藤省三、稲山絢太郎、白水半次郎、若林克己、木村作治郎の5名が全

# 初代校長 新保寅次



新保寅次校長

初代校長には、新潟県出身で鹿児島県立第二中学校長であった新保寅次が就任した。一高(東京)の出身者であり、入学宣誓式で一高、三高(京都)を凌駕せよと発破をかけ熱心に教育する一方、旧設高校の型にはめるようなことはなく、学生の自主自立を尊重した。

「(— 中略)固より創立の年月に於て吾々は最も新参である。併しながら努力する新参が故参を凌駕し得ば人生の快事である。  
(— 中略)諸君が三高を凌駕し、一高を凌駕するが如き、之に比すれば実に易々たるのみ。切に諸君の努力を望むのである。」  
(入学宣誓式式辞より)

学生たちは若さゆえ、時に不始末を起こすこともあったが、新保校長はたとえ外部から圧力があっても直ちに厳罰を下すようなことはなく、悪質でないものには寛大に対応し、常に学生の味方であった。学生たちはこのような校長を「親爺」と慕い、自分たちがこれからの校風を創るのだという理想に燃え、自治を尊び、自由を楽しんだ。

## 物議騒然！ 一大正11年記念祭事件

大正11(1922)年、新保校長が出張で不在の記念祭で、その騒動は起こった。原因は、寄宿生の展示物のひとつであった。それは、歴史上の人物の卒塔婆を並べておくというもので、厚紙で作った墓標に法名が記され、香花、賽銭も手向けてあったらしい。豊臣秀吉やナポレオン、小野小町などに混じって、当時存命中であった大隈重信、山縣有朋等の墓標が作られていたため、「防長の大先輩であり、国家の元勳たる山縣元帥の墓標を生前中に建てるとは、元帥を呪詛するものである、けしからん！」と、大騒ぎになった。

もちろん学生側に山縣有朋を呪詛しようという意図などなかったが、騒動はなかなか治まらず、校長の責任を問う声まで出始めた。騒動は2週間にわたり続いたが、当時の県内務部長の理解を得て戸沢教頭が尽力し、この問題を収束させて事無きを得た。

学生の他愛もない悪ふざけがここまで大騒動になった背景には、もともと他県人である新保校長の着任への不満の声があり、この問題に乗じて校長排斥運動へつなげようという思惑があったのかもしれない。

文部省での用事を済ませ、急いで帰って来た新保校長は「山口は四方に山を環として居るので一寸した事でも反響し鳴動が大きくなるから、あまり突飛な事は慎んだ方がよからう」との訓戒をしたという。

# 新保校長留任運動

昭和4(1929)年7月2日朝、新保校長の松本高等学校への転任の知らせが届いた。この報を受けた生徒一同は、直ちに留任運動を展開する。各学年から計16名の委員を選出し、次の決議を為した。

「吾等一同の最も畏敬する新保校長御転任の報に接し痛感にたへず、ここに生徒大会を開いて校長御留任嘆願を決す 山口高等学校新保校長留任運動実行委員」



岩田博蔵校長  
(『柳桜をこきまぜて』より)

実行委員は、山口県出身の貴衆両院議員、各地在住の先輩に援助を求める電報を打ち、山口市内各所に「新保校長留任絶対必要」などのビラを貼り、日夜演説会を開き市民の支持を求めた。また、生徒の4名が上京し、文部大臣、次官等に会見し、留任を嘆願した。

しかし、在京先輩団から、必要以上の留任運動は新保校長にも迷惑がかかるとの意見を受けた上京委員は、10日帰校後に第5回生徒大会で遺憾ながら運動の中止を決定した。

昭和4年7月、二代校長に岩田博蔵を萩中学校から迎え、旧山高は新たなる発展の時期を迎えた。

## 留任運動の裏側には・・・

新保校長に転任の辞令が出た同じ日に、田中義一内閣が総辞職している。田中首相と岩田新校長は個人的交友関係があり、この人事を内閣総辞職の混乱に乗じたものと見る向きもあった。騒動の背景には、生徒たちの純粋に新保校長を惜しむ思いだけでなく、田中総理が個人的に人事を玩弄したことへの反感もあったようである。

## 新保校長の銅像建設

旧山高では、新保校長の転任を惜しんで銅像が建てられた。生徒に慕われた新保校長であったが、新保校長もまた、山口を去るにあたっては、感慨深いものがあったようである。

「私は山口を去ってどこへやられるにしても決して栄転とは考えない。諸君の今日の御厚意に対して感謝感激の他はない。私は今日までかなり厭世的であった人生観を諸君によって全く覆された。この上はこの老躯を鞭打って

更に山口に留まることができなくても教育に尽瘁しようという勇気が出た。諸君の厚意は終世胸に留めて忘却しない。」(新保校長告別式挨拶)



新保校長の銅像の前で

# 校舎の建築

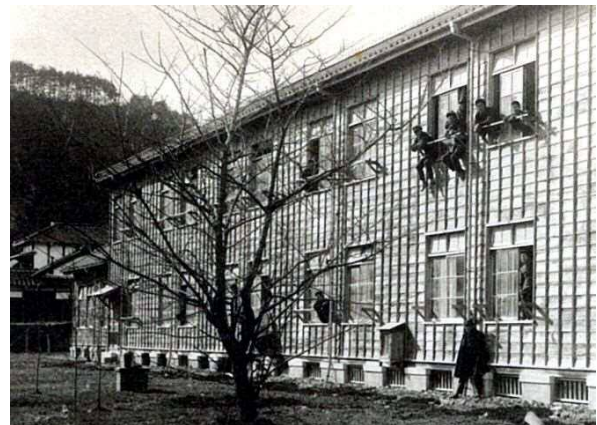
開校1年後の大正9(1920)年8月、校舎本館、寄宿舍3棟が完成し、9月1日に仮校舎から正式に移転した。その後、特別教室、講堂その他の建物も順次完成し、大正11年5月16日、新しい講堂で毛利元昭公爵、文部省学務課長、山口県知事、その他250名を招き、校舎落成式が盛大に行われた。



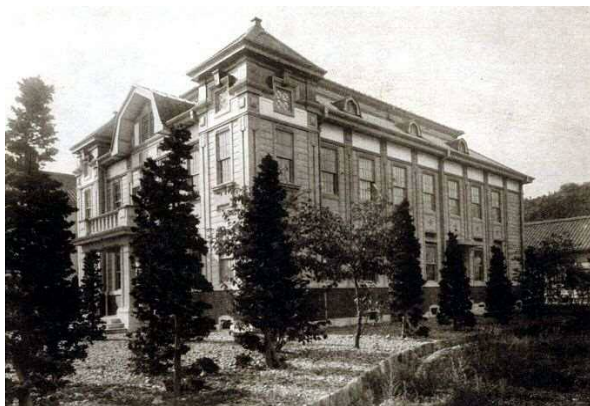
落成式



校舎本館(玄関)



寄宿舍(鴻南寮)



講堂



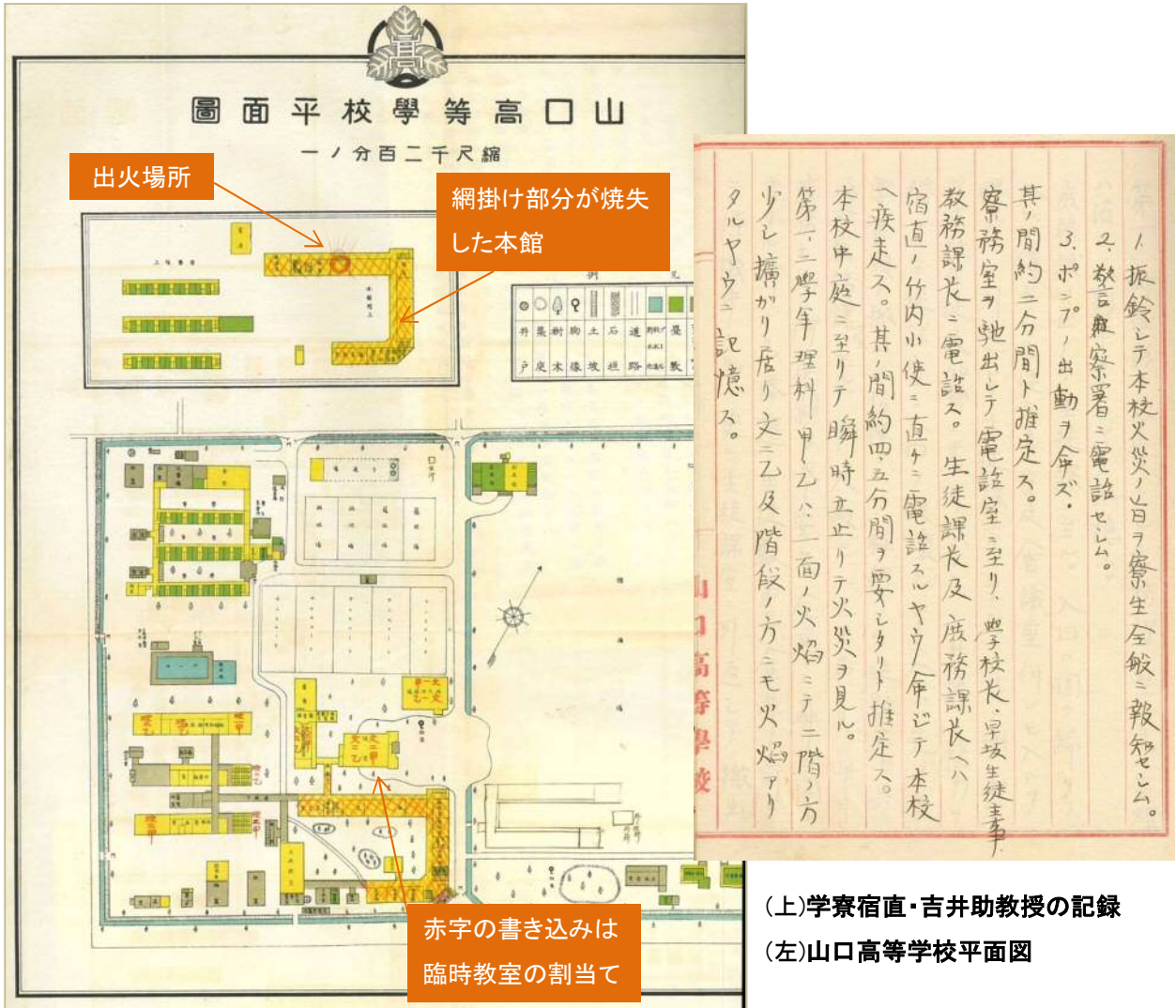
現在の講堂(県立山口高等学校内)

平成18年に改築された

旧山高の建物は、講堂のみ記念館として現在も山口県立山口高等学校の敷地内に残っており、管弦楽部の部室として使用されている。

# 火事による本館の焼失

昭和11(1936)年10月29日午前3時頃、旧山高の本館2階から出火し、市内の全消防組、山高、山口高商、師範、連隊の各消防班、付近町村の公私設消防組などで消火作業が行われた。しかし、連日続いていた干天で建物が乾燥し切っていたこともあり、本館全部を焼失し午前5時半頃鎮火した。出火したのは、理二甲の教室で、煙草の吸殻の不始末が原因であったとされる。重要書類や調度品の大部分は運び出されたが、階上の考古学関係、歴史学関係の資料の大部分は燃えてしまった。



(上)学寮宿直・吉井助教授の記録  
(左)山口高等学校平面図

火事の後、本館が使えないため、他学校に教室の借入れの要望を出したが、山口高商は教室の不足の上、満州国学生を多数収容したためにさらに狭隘であり、山口師範も建物敷地、共に狭隘で、常に小学校教員講習会等を開催しているため、全く余裕がないとして借りることができなかった。教室は、体操場や他の教室で代替し、新校舎の工事が始まった。翌年6月、木造2階建てで防火壁の設備もある立派な校舎が完成し、2学期から使用が開始された。

# 学校行事

開校初年度より、修学旅行や長途競争などの行事が実施され、校内弁論大会やクラスマッチ、部活動の大会なども活発に行われた。その他、創立記念祭、松山高校野球部との親善試合なども年中行事として継続して行われた。

## 修学旅行・創立記念祭



萩への修学旅行(大正15年)

第1回の行き先は大宰府・博多であったが、やがて萩への一泊旅行が定着していった



創立記念祭(大正11年)

運動会や余興、運動部の大会、展覧会等のさまざまな行事の他、寮の飾り付け、提灯行列なども催された

## 長途競争・野球親善試合



防府への長途競争(大正15年)

後河原の山口座(元公設市場の辺り)を出発し、ゴールの防府天満宮まで約20kmの距離を競った  
写真は防府天満宮にて防府町婦人会からお汁粉の接待を受けている様子



松山高校との野球親善試合(大正11年)

大正9年の第1回対戦以降、昭和22年まで継続して行われ、全校をあげて応援に出向く一大イベントであった





# ジンゲルストライキ



ジンゲルスト籠城本部  
 (『柳桜をこきまぜて』より)

昭和9(1934)年、秋の創立記念祭前夜に事件は起きた。ある生徒2名が、芸者(ジンゲル)を寮に入れたことが、風紀を乱すとして2ヶ月の停学処分とされた。これを受け、生徒は寮に結集して5日間盟休。さらに、56名が停学処分になった。なぜストライキにまで発展したのか、生徒の大方が同情するのか、学校側は解せなかった。

実は、この事件には事情があった。当事者となったのは、生徒に人気があった小万龍という芸者で、彼女は山高の青年教授と結婚の約束をしており、所帯道具を買い集めていた。その頃、岩田校長から、青年教授に地元財商の妹との縁談が持ちかけられた。その結果、別の教授が小万龍に手切れ金を持って行った。傷心した小万龍を元気づけようと、生徒は記念祭の飾り付けを見せるため、寮に入れようとしたところを、寮監督に見つかったのだった。

3日間の記念祭が終わったとたんに停学処分の掲示があり、生徒が集まっているところに、生徒主事が「不穏な動きをすると、司直の手を入れるぞ」と言い放ったという。この一言で生徒が一斉に反発しストライキに至ったのである。事情を知らない生徒までもが、寮の自治が侵された、と立てこもった。ジンゲルストライキの途中で、一部生徒が青年教授のことを暴露する声明書を出そうとしたが抑えられてしまった。校長と生徒双方が謝ることで収拾することとなったが、結局校長は謝らず、生徒は不信感を募らせた。翌春、岩田校長と生徒主事は辞任し、なんとも後味の悪い事件となった。

## 旧制高校用語と流行スタイル

旧山高では、ドイツ語教育に力を入れていたためか、学生たちはドイツ語由来の独特の旧制用語を多用し、バンカラな学生生活を過ごしていた。

用語	意味	ドイツ語
ジンゲル	芸者	Singer
ドッペル	留年する	Doppel(二重)
メツェン	女子	Ein Mädchen
ゲル	お金	Geld



バンカラとは、西洋かぶれというハイカラの対義語で、野蛮に振る舞うことを言う。着古し擦り切れた学生服・マント・学帽・高下駄、腰に提げた手拭いなどを特徴とするスタイルで、粗末な衣装によって「表面の姿形に惑わされず真理を追究」という姿勢を表現したものとされている。

### 旧制高校用語

# 学生生活

## バンカラな学生生活

旧山高生は山口市内の他校の学生と比べても、やんちゃな学生が多かったようだ。自由な寮生活は居心地が良過ぎ、酒を飲んで大声で暴れまわるストームも、とにかく激しかった。宮島への一泊の旅行や、萩への修学旅行でも、行く先々で路上ストームをしては、「狼藉者山高生暴る」等、新聞に書きたてられた。

山口市内での悪戯は、もっぱら看板の取り替えであった。ごみ箱を並べて、ハードル競走をしたりもした。夜が明けて、学生たちの仕業を見た町の人々は、「こりやあまた、生徒さんたちの仕事でよ」と言い、度重ねても大らかに許された。町の人たちにはとても可愛がられていたようだ。



コンパの席で「ストーム！！」と叫び、続けて名前、出身地、所属学部などの自己紹介を行う「ストーム」と呼ばれる行為。現在でも山大の寮や一部の部活・サークルで行われている。形は変わっているが、山高時代から脈々と学生の間で受け継がれている。

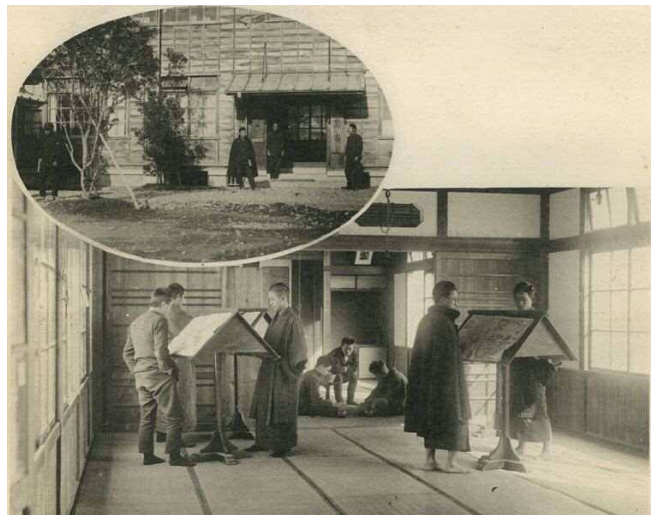
## 青春のひとコマ



桜の下で



鴻南寮の一部屋



鴻南寮・新聞閲覧室



校内売店

## 校友会の活動

校友会は文化部・運動部から構成されており、学芸部、弁論部、野球、剣道、蹴球、水泳等、様々な活動を行っていた。中でも野球部は、設立当時から松山高と毎年対戦を行っており、旧山高の一大イベントとなっていた。

各部は会誌を発行しており、論調や文化部の作品に左翼的な動向や戦争の影響が見られるなど、時代と共に変化していく当時の学生の思想を垣間見ることができる。



会誌の一部



陸上部



(上)自動車部

(左)水泳部

## 金メダリスト輩出

昭和11(1936)年、ドイツでベルリンオリンピックが開催された。この大会で、田島直人が三段跳び16mの世界記録を樹立し、金メダルを獲得した。田島は岩国から、昭和4年(11回文乙)に入学した。在学中も、第6回インターハイで100m優勝、走幅跳優勝、走高跳2位、棒高跳3位、三段跳4位と史上最高成績をあげ、陸上競技部の花形選手であった。

オリンピックで副賞として贈られたオークの苗木は、旧山高卒業後に進学した京都大学に植えられ、「オリンピックオーク」と呼ばれている。この樹から採れた実を発芽させて育てた苗木は、現在の山高にも植樹されている。



田島選手の快挙に沸く旧山高の様子を伝える記事  
(「防長新聞」昭和11年8月8日)

# 山口県師範学校

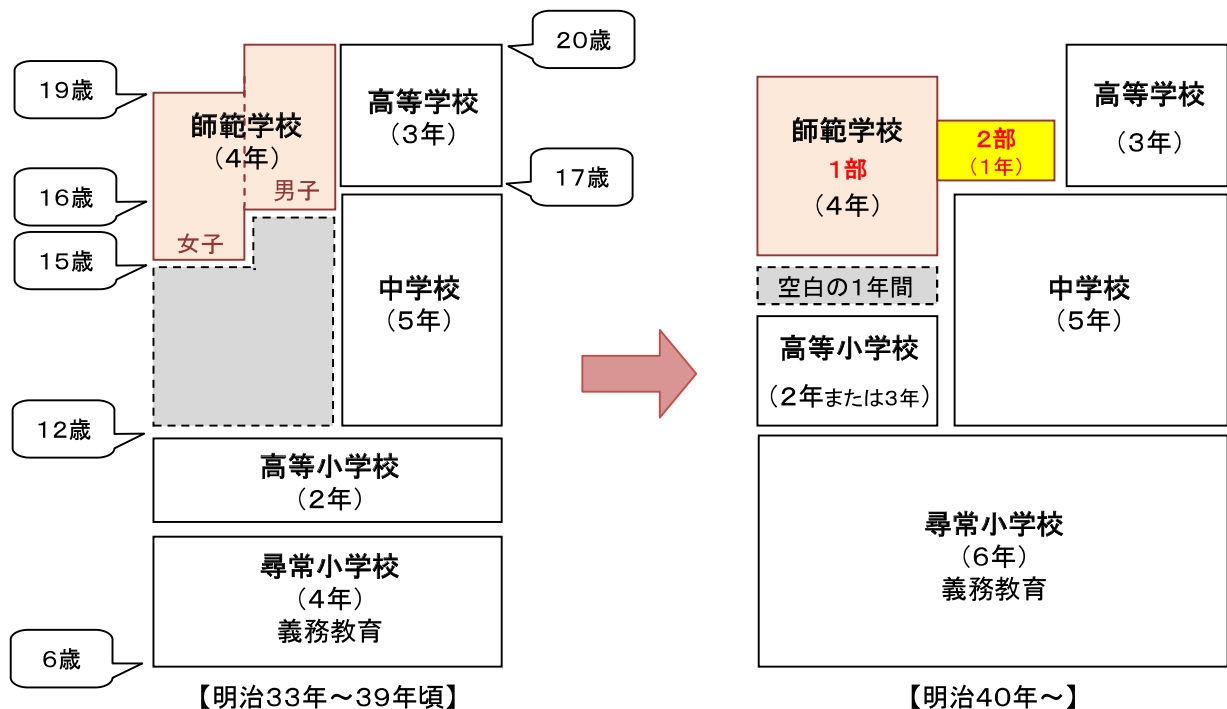
山口県教員養成所から出発した師範教育は、着実に発展を続け、多くの教員を輩出してきた。師範学校は授業料が無償であることに加えて学費までもが支給されたため、家庭の経済的事情から中等教育機関への進学を断念しなければならなかった者にも、その門戸を開いていた。

明治30(1897)年に公布された「師範教育令」により、翌年、県は山口県尋常師範学校を山口県師範学校と改称した。また、明治40(1907)年に制定された「師範学校規程」により、山口県師範学校は本科を1部と2部に分け、修業年限を1部は4年、2部は1年とした。

「師範学校規程」以前は、尋常小学校、高等小学校を卒業し、師範学校へ入学するルートが主であったが、2部ができたことにより、中学校を卒業し、師範学校へ入学するという別のルートが整備された。2部の卒業生には、1部生と同等の教員資格が付与され、教員の質的向上が期待された。



山口県師範学校正門



「師範学校規程」による進学体系の変化

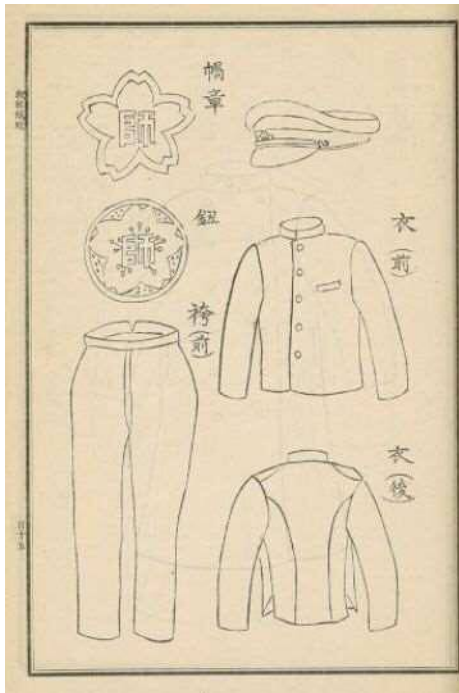
# 山口県室積師範学校の開設 一二師範時代の開幕一

明治40(1907)年の「小学校令」改正により、小学校正教員の確保が緊急の課題となった。山口県においても第二師範学校設置の必要性が次第に高まり、県はその対策として、大正3(1914)年、県立工業学校を第二師範学校に転用することとした。

室積の県立工業学校は、工業従事者の育成を目的に明治36年に開校したが、県内での卒業生の需要が意外に乏しく、他県へ就職する者が多かったため、廃校とすることが決まった。



山口県室積師範学校正門



室積師範学校の制服  
(『室積師範学校一覧』より)

第二師範学校の設置理由を当時の馬淵知事は県会で次のように説明している。「教員不足のため三割近くを検定教員(※)に頼っているのが現状である。その検定教員は師範学校卒業生に比べ多くは劣るが、不足の事態を考えると少々力量不足でも採用しなければならない状況にある。一学級一人の正教員を確保せねばならぬ。」

大正3年4月1日、山口県室積師範学校が開設された。これにともない山口の本校は山口県山口師範学校と改称され、2つの師範学校の並立時代を迎えることとなった。

大正14年4月、「師範学校規程中改正」により、師範学校に画期的な改革が起こった。それまで、師範学校は入学年齢を15歳と定めていたため、中学校にも小学校にも接続しない、いわば進学体系から孤立した状態であった(左頁の図参照)。しかし、この改正により、満14歳から入学が可能となり、高等小学校からの進学がスムーズになった。また同時に、専攻科も新設され、教科研究の領域に特色を持った優良な教員の養成が可能となり、教育水準を高める上で重要な契機となった。

※ 検定教員とは・・・

教員免許状を有しない者で、都道府県が行う検定試験によってその資格を得た教員のこと。明治13年から実施された「小学校教員免許状授与試験法」がはじまりで、様々な事情で師範学校等に進学できなかった者でも独学、独力によって資格が取れたため、教員の充足にもつながった。

明治33年(1900)年時点で、小学校の有資格教員は男子 1,403名、女子89名と女子教員は全体の約6%程度に過ぎず、しかも半数近くが専科(家事裁縫)教員であった。

県は、女子正教員の充足を図るために、大正8(1919)年4月、山口師範学校に本科女子2部を併設した。この女子2部は、開設年より志願者が募集定員の2倍に達するほどであった。この状況

を受け、翌年には室積に山口県女子師範学校が設置された。これにともない、室積師範学校は廃止され、室積師範の男子は再度改称された山口県師範学校に、山口師範女子部の学生は室積の女子師範学校に移動となった。



山口県女子師範学校全景(大正9年頃)



工芸の授業風景

他府県の多くは、女子教員の養成のため明治年間には女子師範学校を設置し、その需要に応じていた。本県でも遅れ馳せながら男女両師範学校を備えるという典型的な教員養成制度が確立したのである。このことは山口県近代教育史上、重要な出来事であった。両師範学校は、昭和18(1943)年に官立山口師範学校として再び統合されるまでの24年間、独立した別個の学校としてその歴史を刻むことになった。



東京への修学旅行(二重橋の前にて)

## 官立への昇格

師範学校を中等教育として留めておくことは、教員養成の重要性からみても、生徒の学歴、年齢からみても不自然であり、その改善は早くから叫ばれていた。教育振興の要諦は教師の資質にあるとして師範学校の昇格が図られ、昭和18(1943)年3月、「師範教育令」の改正により中等学校に接続する高等専門学校への昇格が実現した。

同年4月、山口県師範学校と山口県女子師範学校が統合されて官立山口師範学校に昇格。従来の1部・2部制を廃止し、本科を修業年限3年の高等専門学校に改めると同時に、修業年限2年の予科を設置した。本科の入学資格を、予科、中学校、高等女学校の卒修業者とし、男女で別個の学校であったものを一師範学校に統合して、それぞれ男子部・女子部とした。施設は、男子部は山口県師範学校、女子部は山口県女子師範学校のものを襲用した。初代校長には三田主市が就任した。

この大改革は期待甚大であったが、成果を上げることなく次第に形骸化していくこととなった。しかしながら、この官立への昇格が後の山口大学教育学部へとつながっていくのである。



三田主市校長

### 天皇行幸 —3つの碑—

師範学校は、明治18年7月に明治天皇、明治41年4月に大正天皇(当時は東宮)、大正15年5月に昭和天皇(当時は皇太子)と、3度の来校という名誉を受けている。それぞれの行幸の際に記念碑が建設され、今もその歴史を刻んでいる。



光被(伊藤博文書)  
附属山口小学校正門



時擁(山縣有朋書)  
附属山口中学校正門



俊徳(野村素介書)  
教育学部前庭

# 学校生活

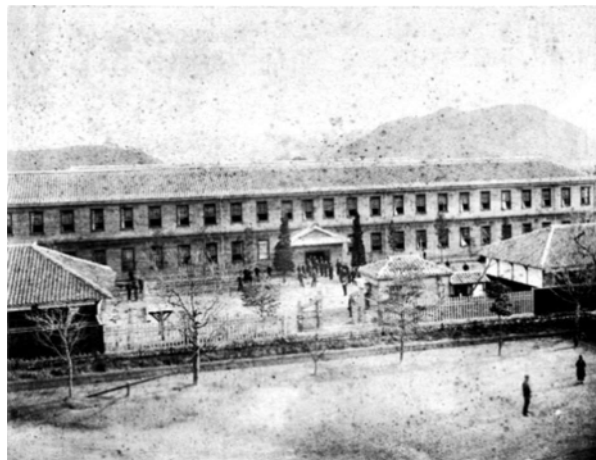
## 寄宿舎

明治末頃から大正年間にわたって、師範教育の充実とともに施設整備も進んだ。中でも寄宿舎は、多くの学生の生活拠点として充実が図られた。当初より師範学校は全寮制であったため、近隣の学生でも自宅通学は許可されなかった。

寄宿舎は、山口県尋常師範学校時代には現在の山口市役所の辺りに校舎と並んで建てられていたが、学生数の増加にともない狭隘となったため、明治32(1899)年からは、通りを隔てた山口尋常中学校(現在の山口市民会館)の移転後の建物も利用した。その後、増改築を行い明治34年4月には同所に寄宿舎3棟と食堂が完成した。玄関と道路の間に広場があり、テニスコートや器械体操具を配した当時としてはハイカラな建物であった。

1階に自習室と生活室、2階に寝室という造りになっており、寝室にはワラ布団を敷いた寝台が並べられていた。掃除や食事の時間、門限など規律は厳格であった。しかし同室会や全寮挙げてのうさぎ狩り、榎野川の蛍狩りなどの寮ならではの楽しい行事も多くあったようである。教師の育成において重要な場であった寄宿舎は、後に「時擁寮」と呼ばれるようになり、多くの若者の学生生活を支えた。

大正2年には女子部も寄宿舎ができる。はじめは下豎小路にあったが、大正9年の女子師範学校設立とともに室積に移転した。



明治34年4月に完成した寄宿舎



食堂

(「青史」昭和14年卒業生記念誌より)



自習室

(「光被」昭和4年卒業生記念誌より)



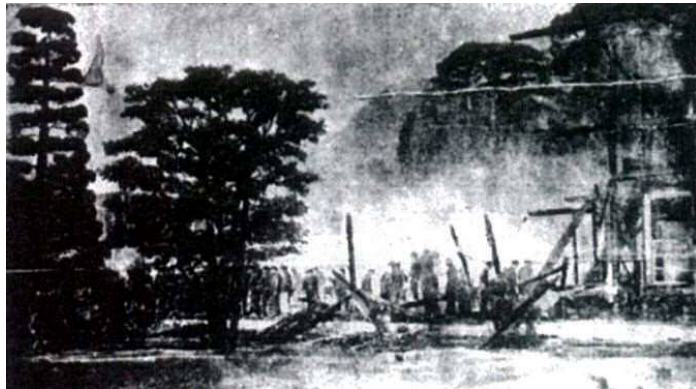
# 本館の焼失と再築

教員養成所時代には、山口明倫館の洋学寮の教場を襲用していたが、その後、同所に2階建ての新校舎を建設した。しかし師範学校となり、学生数の増加から教室が狭くなったため、明治20(1887)年、上司淵蔵校長の時代に土地を購入し、明治25年から3か年計画で校舎を増築した。



明治28年に完成した本館

ところが、昭和2(1927)年12月11日、この校舎は火災という大惨事にみまわれる。午後7時30分、本館2階より出火し、すさまじい勢いで燃え広がり辺りは火の海と化した。亀山付近には黒山の人だかりができ、軍隊や消防組、高等学校生徒の消防隊の消火活動に加え、師範学校生徒も寄宿舎からバケツを手当たり次第運び出し、必死の消火活動を行った。午後9時頃、1階と2階すべてを焼失し鎮火。損害額は約5万円ともいわれた。火災の原因は不明で、放火の疑いもあると当時の新聞は伝えている。



(上) 焼失した本館(「関門日日新聞」昭和2年12月14日)



(右) 火事を伝える記事(「防長新聞」昭和2年12月13日)



昭和4年に完成した本館

全焼という事態を受け、県は焼け跡に本館一棟を1年かけて再築することを決め、昭和4年4月、スレート葺で白亜のモダンな校舎が完成した。1階・2階に8教室、玄関は自動車昇降に便利な造りで、清楚なバルコニーもあった。計画の段階では、耐久性から鉄筋コンクリートにする案もあったが、県財政の逼迫により木造となった。この建物は、後に山口大学教育学部の校舎となり、次に改築される昭和30年後半まで多くの学生の学び舎として使われ続けた。

## 水泳鍛錬

師範学校では、生徒の心身の修養鍛錬のため、明治38(1905)年から、毎年9月初頭に榎野川出合で水泳鍛錬を行った。水泳鍛錬は女子師範でも行われ、室積湾一周約4kmを、4時間30分で泳いだという記録もある。



第1回水泳大会(大正2年頃)



女子師範の水泳の授業

## 教育実習

師範学校では学習の総仕上げとして教育実習があった。県下教育界でエリート中のエリートともいえる附属小学校の訓導(当時の正教員をこう呼んだ)の下で、70日間の実習が行われた。この時ばかりは夜の12時過ぎても寮の明かりが消えないくらい猛勉強をしたという。



実習の様子(1年生の運動の授業にて)

## 修学旅行

5月の初め、最終学年になると9日間の修学旅行があった。当時の修学旅行は学校の授業として扱われ、旅行中も校内と変わらぬよう規律厳守・公德尊重を説いている。昭和15(1940)年の



(上) 鎌倉での記念撮影(「光被」第5号より)

(右) 修学旅行の葉(昭和15年のもの)



修学旅行は5月4日から12日の間、三府(東京・京都・大阪)を回った。山口を朝6時頃出発し、大阪、奈良、鎌倉、東京、京都を見学し、12日の朝6時ごろ帰ったようである。

## 奉公塾

皇国民の教育にあたる教員を養成するにあたって、山口県師範学校時代に苦瓜恵三郎校長は、農業こそがわが国民的性格の母胎であり、皇国民精神の淵源もまたここにあるとして、昭和14（1939）年8月、山口市内の法泉寺（現在の滝町の辺り）に田地約1町5反と農家1軒を借り受け、奉公塾を開設した。毎日1名ずつ入塾し、一週間ここで生活を送り退塾していた。



奉公塾の塾舎

学業成績にかかわらず、毎日、入塾者の半数は塾舎から登校し、半数は農地の開墾や作物の植え付けなどに従事した。この塾は昭和18年頃まで存続していた。

## 校友会活動

校友会は明治36（1903）年に創設され、精神修養や身体鍛練、レクリエーションを兼ねた行事を、教職員と生徒が一体となって行った。校友会では、校内活動のみならず、広く県下の青少年や児童の文化、体育の振興発展を援助するような活動を行っていた。



学童音楽会

文化部、運動部それぞれ活動していたが、生徒の心身の強化鍛練という立場から運動部の活動はとくに奨励されていた。そのため1、2年生の間は運動部、3、4年生になると運動部を退部するか、またはそれと並行して文化部で活動を行う生徒が多かったようである。運動部の活動ではそれぞれ優秀な成績を残した。



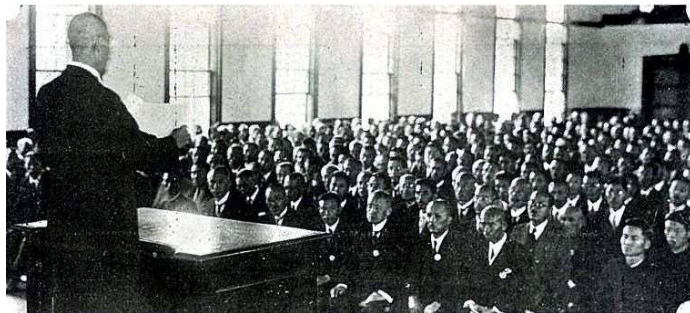
相撲部



排球部

# 創立 60 周年記念事業

山口師範学校の前身となる山口県教員養成所の開設から、60周年にあたる昭和9(1934)年、当時の金額で総額 3,540 円を投じて、創立60周年の記念式典が挙行された。60年史の刊行や校訓・校歌の制定、運動会など、多彩な行事が行われた。



記念式典で式辞を読む山本昇校長

## 記念行事一覧

10月1日(月)	校歌記念式歌制定
7日(日)	記念運動会
10日(水)	創立60年史完成
16日(火)	慰霊祭
	郷土展覧会(第1日)
17日(水)	創立記念式
	記念祝賀会
	郷土展覧会(第2日)
18日(木)	記念学芸会
	郷土展覧会(第3日)
	校内祝賀会

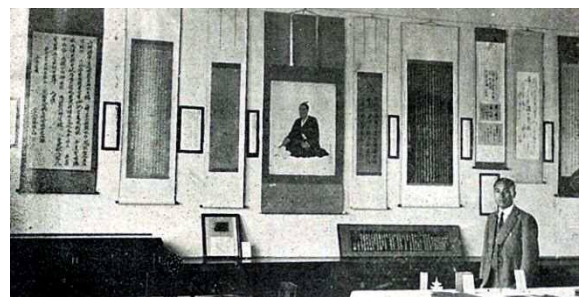


記念運動会の模様

## 郷土室と郷土展覧会

昭和5(1930)年、文部省は各師範学校に研究奨励費を交付して郷土室の設置を奨励した。これを受けて山口師範学校にも「郷土室」が設置された。郷土資料収集、整理が行われ、郷土の自然や文化の実態を研究・理解する場として利用された。

60周年の際には、記念行事の一つとして郷土展覧会が開かれ、郷土室保管のものを中心に、さまざまな資料が展示された。



(上)郷土展覧会の様子

(右)「賢哲墨蹟屏風」

上司元校長収集のものを記念事業の一つとして師範学校に保存し公開した



## 校訓・校歌の制定

60周年を記念して、山本昇校長により、これまで培われてきた伝統をもとに校訓が制定された。この校訓には戦前の師範教育の中核をなした「師道の錬成」がうたわれ、当時の山口師範学校の教育目標を如実に表したものとなっている。生徒はこれを暗唱し、事あるごとに斉唱したという。

また、校歌も同時に制定された。作歌は輿水淑を中心とする国漢文と音楽科の教師が担当し、作曲は当時多くの校歌を作曲していた信時潔のぶとききよし氏に依頼した。師範学校の伝統や環境から醸し出される教育精神と、防長の歴史地理から発揚する報国観念を盛り込んだものであった。

### 校訓

教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉体シ、敬虔報酬ノ念ヲ培イ、自治協同事ニ当リ、勤勞奉仕ニ努メ、質実剛健ナル精神ヲ養ヒ、之ヲ貫クニ至誠ヲ以テシ、以テ天壤無窮ニ皇運ヲ扶翼シ奉ルコトヲ得ヘキ善良有為ノ国民教育者タラムコトヲ期ス

### 山口師範学校校歌

一、青史をかざる防長二州  
大陸ちかき皇国の要地  
その教育の源泉こそは  
我等が学ぶ山口師範

二、朝日の庭に拜む聖碑  
畏き御勅心にきざみ  
夕照る丘に仰ぐ銅像  
深くも偲ぶ維新の勳

三、師道は振ふ松下の塾に  
天地も動く至誠の教  
士風は薫る乃木の社に  
古今を照らす義烈の鑑

四、嗚呼伝統の精神継ぎて  
大国民の教育興し  
皇運永久に扶翼し奉る  
覚悟は堅し我校健児



祝賀会(「師範学校同窓会誌会報」第19号より)  
予想よりはるかに大勢が集まり、立食になるほどであった

# 青年師範学校 実業教育教員養成の道

## 実業補習学校の成立と教員養成

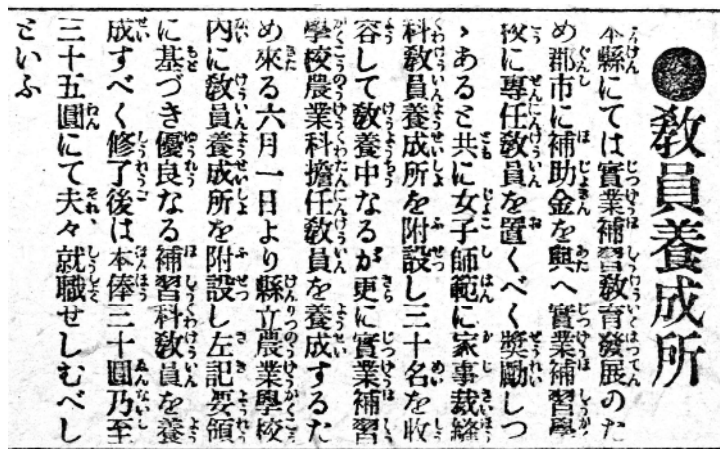
明治時代、日清・日露戦争を契機として国の産業経済が急速に発展し、これに従事する者の教育が急がれるようになった。このため政府は、明治26(1893)年、「実業補習学校規程」を公布し、勤労青少年に実業教育と普通教育の補修を行う実業補習学校を設置することとした。この当時は、実業補習学校が小学校に併設されていたため、教員は兼務の状態が大半であった。

実業補習学校が普及する中、農業教員養成の必要性が高まり、大正4(1915)年3月、小学校農業科および実業補習学校の農業科専任教員を養成する目的で、山口県山口師範学校に農業教員養成所が付設されることとなった。これが後の青年師範学校へとつながっていく。

この農業教員養成所は希望者が少なかったため、県立農業学校に移管されることとなり、大正9年6月、山口県農業教員養成所が県立農業学校に付設された。なお、同年には室積の山口県女子師範学校に山口県家事裁縫科教員養成所が付設された。

大正9年の「実業学校令」の改正により、実業補習学校の性格をより明確にするための教員養成が必要となり、「実業補習学校教員養成所令」が公布された。これを受けて、翌年、県では山口県立女子実業補習学校教員養成所(山口県女子師範学校内)、山口県立実業補習学校農業科教員養成所(県立農業学校内)を設け、専任教員の本格的な養成に着手した。こうした県の努力もあって実業補習学校の教員は学校数の増加にもなって充実していった。

実業補習学校農業科教員養成所の門



教員養成所の付設を伝える新聞記事

(「防長新聞」大正9年4月27日)



# 青年学校の発足

第一次世界大戦後、国力の増進を目的として青年教育の振興が図られていた。大正14(1925)年には、中学校以上の学校に現役の軍人を配属して軍事教練を行うと同時に、勤労青年に対して軍事教育を施すために青年訓練所を設置した。

この青年訓練所と実業補習学校は施設や教員、対象者が重複するが多かったため、昭和10(1935)年4月に公布された「青年学校令」によって、青年学校として統合された。青年学校は、勤労青年を対象とする中等教育程度の定時制の学校で、昭和14年には義務制(男子のみ)となり、昭和22年まで存続した。

## 青年学校教員養成所から青年師範学校へ

青年学校の発足にともない、昭和10年、県は山口県立実業補習学校農業科教員養成所を山口県立青年学校教員養成所と改め、専任教員の育成を図った。同時に、山口県立女子実業補習学校教員養成所も山口県立女子青年学校教員養成所と改称した。

この当時はまだ、それぞれ小郡農業学校、女子師範学校に併設という状態であったが、次第に養成所の独立が問題となっていた。

昭和16年4月、県は養成所の独立を決め、先に女子青年学校教員養成所が移転していた防府の三田尻村(現在の桑山)に、青年学校教員養成所を移転させると同時に、女子の養成所を併合し女子部とした。

昭和19年2月、「師範教育令」の改正にともない青年学校教員養成所は師範学校と同様に官立移管され、山口青年師範学校となった。修業年限3年の専門学校程度の学校に昇格したことで、青年教育の飛躍が期待されたが、教育内容の面ではむしろ後退しながら終戦を迎えることとなった。



防府移転を伝える新聞記事  
 (「防長新聞」昭和16年4月2日)

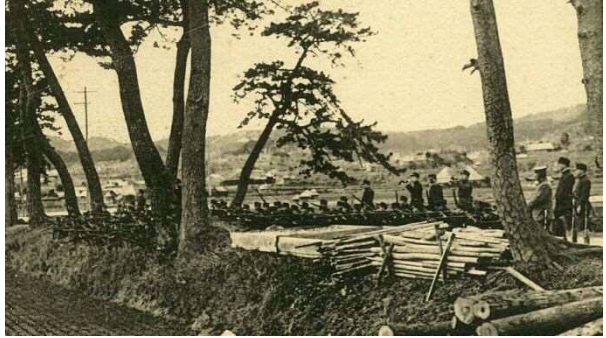


山口県立青年学校教員養成所

# 農業教育の発展

## 大正期の農業教育

大正6(1917)年、内閣に設置された臨時教育会議の答申により、農業教育に関しては知識技能の習得とともに、徳性の涵養が強調され、有為な農業経営者、農村振興の中堅人物の養成が教育方針として打ち出された。さらに、文部省は大正9年の実業学校令の改正にとともに、翌年には農業学校規程を改正し、農業教育の内容や方法を刷新した。まず、入学資格と修業年限の異なる甲種・乙種の区分を制度上廃止、入学資格は一律に尋常小学校卒業程度とし、学歴によってその修業年限を定めた。学科目も改正し、普通科目を多くした。これは、農業に従事する中堅人物の養成を行いながらも、正規の中学校に近い教育内容とすることで、その代替としての効果を期待したためでもあった。また、同時に女子の農業教育に関する規程も設け、女子実業教育の振興にも留意した。



農校生の発火演習(大正10年)

## 昭和初期の農業教育

第一次世界大戦の好景気により不自然な膨張をきたした産業界は、戦後しだいに不振に陥っていった。生糸の暴落による養蚕業の不振、農産物の価格下落など、農村事情も悪化していった。

こうした社会情勢の中、政府は農村経済の更生と再建を目的とする「農山漁村経済更生計画」を打ち立て、農民精神の鍛錬のための農民道場や農士学校を各地に設立するなどし、農業経営技術の体得と農民の自力更生を図った。

一方、文部省は、昭和4(1929)年、「農業学校規程」を再び改正し、農村の生活困窮という状況を受けて教育費負担軽減のため、修業年限2年の農業学校も認めた。また、道德教育の徹底を図ることを明確にするとともに、剣道や柔道といった武道を体操中に含め必須科目とした。戦争物資や労働力が不足する中、農業学校は特に「農業報国」の精神が強調され、食糧増産の一翼を担う国民の錬成に重点が置かれるようになった。そのため学科の拡充が行われ、労働力を補給するため女子農業学校の拡充も奨励された。



修身の教科書

(山口県文書館所蔵)

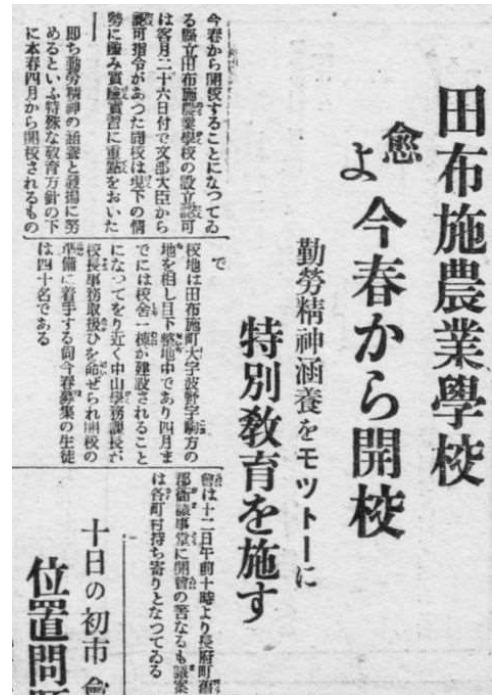


# 県立農業学校の新設

昭和に入っても県内の実業学校は数少なく、農業学校についても小郡と日置の2か所にあるのみであった。昭和8(1933)年、熊毛郡や玖珂郡、豊浦郡で農業学校設置運動がおこった。時を同じくして、県立水産学校を下関に建設する計画も持ち上がり、県は教育調査会を設け諮問した。これに対し、教育調査会は水産学校1校、農業学校2校の新設を答申した。

農業学校は県下の位置的なバランスや交通などを考慮して、周防部は熊毛郡の田布施町、長門部は厚狭郡に新設する案が挙げられた。しかし県の財政難のため、設立にかかる経費は、地元の寄附に依らざるを得ない状況であった。厚狭の方は厚狭・小野田での候補地争いのため郡内の協調が得られず、農業学校の設置はかなわなかった。

一方、熊毛の方は、県立学校がないこともあり、田布施町を中心に県立農業学校の設立に向けて意欲的に活動した。地元負担金10万円余を用意し、県に農業学校の設置を陳情した結果、田布施に県立の農業学校が新設されることが決まった。

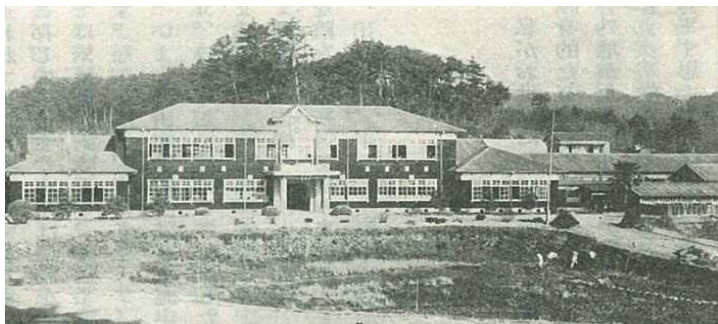


開校を伝える新聞記事

(「防長新聞」昭和10年1月8日)

## 田布施農業学校

昭和10年4月、農村振興を使命とし、農村教育の刷新を目指して田布施農業学校が開校した。時勢の影響もあり、教育方針には、「郷土農業の改善と農村文化進展のために第一線に立ち活躍する国土的農民の養成」とうたわれているように、能力と実行力のある人物を養成することに重点が置かれた。



田布施農業高校 (『田布施農高30年史』より)

校長には、鹿児島県立伊佐農林学校から三好吉重を、教頭には湯田実を招き、地方の農業を振興するため独特の教育を展開した。農業科は授業と実習が一本化した実践農学課程で、教科書は使わず、実習の班は学年の枠を越え編成した。また、家庭学習では全校生の家庭を巡回指導した。

# 山口県立小郡農業学校

山口県立農業学校は、明治43(1910)年には小郡町の山手校舎に移転し、山口県では、唯一の甲種農業学校として農業教育の中核を担い発展を続けていた。



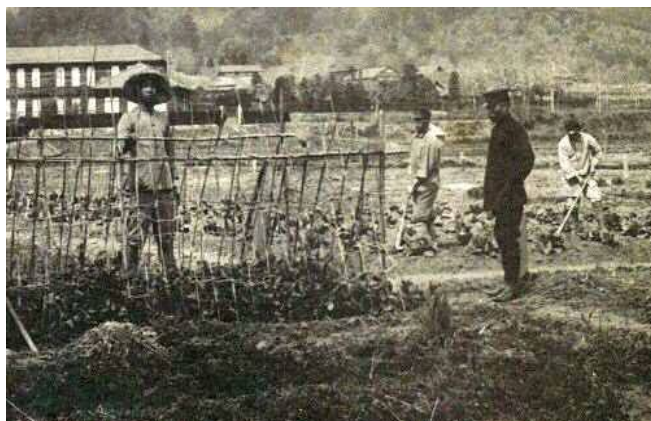
山口県立小郡農業学校 山手校舎全景

大正4(1915)年には予科を廃止し、農・林・養蚕・獣医畜産の4科とした。大正12年、大津農林学

校が県に移管され山口県立日置農林学校となったことにもない、山口県立小郡農業学校と改称した。昭和19(1944)年に、山口県立小郡高等女学校を統合し、昭和23年の学制により山口県立山口農業高等学校と改称し新制高等学校へと変わっていくこととなる。

## 実習

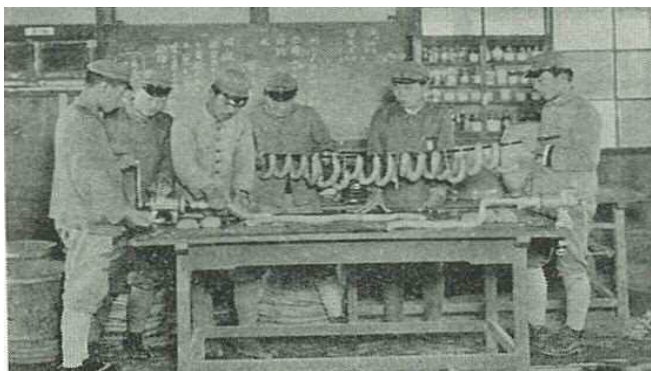
授業は、大正・昭和を通じて終戦まで基本的に午前中に学科、午後に実習という形で行われた。



農科蔬菜実習



林科害虫駆除実習

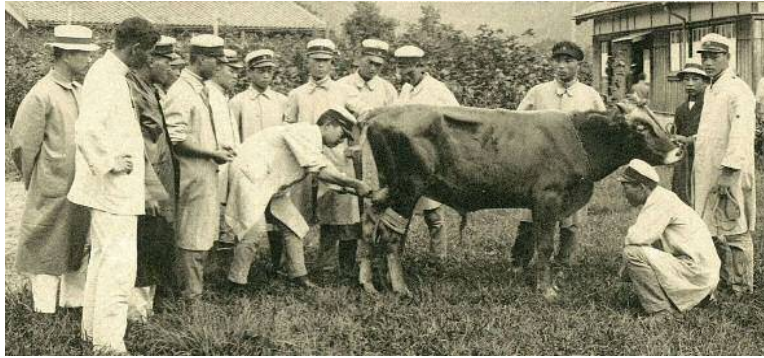


ソーセージの製造実習

(『山口県立山口農業学校百年史』より)

実習服はカーキ色、折り襟の上下服、ゲートル地下足袋姿であった。獣医畜産科は昭和の初めは実習服としてカーキ色のオーバーのようなものを着用し、ゲートル地下足袋は必要に応じて使用したが、後には農科や養蚕科と同じ実習服になった。

## 獣医科附属家畜病院の設置



獣医畜産科実習

獣医科の実習は、農科・養蚕科とは別に行った

大正3(1914)年、従来獣医科の実習に使用されていた手術室兼解剖室を一般の家畜の診断、治療および入院のための病院として、また、生徒の研究を深める実習材料の場として開設した。獣医師は農学校の獣医科教員が担当し、校外治療の依頼にも応じた。

## 寄宿舎

大正期における農業学校の教育方針である技能の習得とともに、徳性の涵養と人格の陶冶は主として寄宿舎での生活や実習で指導された。昭和に入ってから寄宿舎に教練教官が舎監心得として配属され、訓育の徹底が図られた。農業精神、勤労精神の高揚のため、寄宿舎では勤労主義作業が重視され、舎の周辺には菜園、果樹園、養鶏場が設けられた。勤労作業は、朝食や実習の後のわずかな時間に行われた。



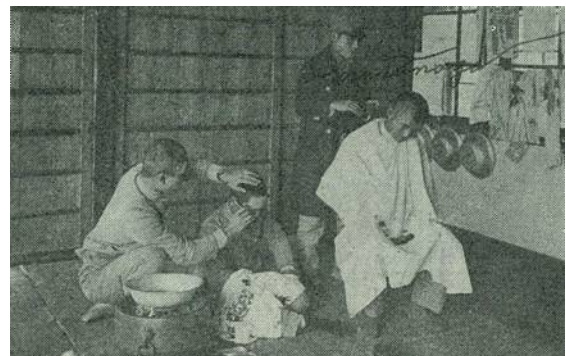
明治43年に完成した寄宿舎

(『山口県立山口農業学校百年史』より)



洗濯も自分たちで

(『山口県立山口農業学校百年史』より)



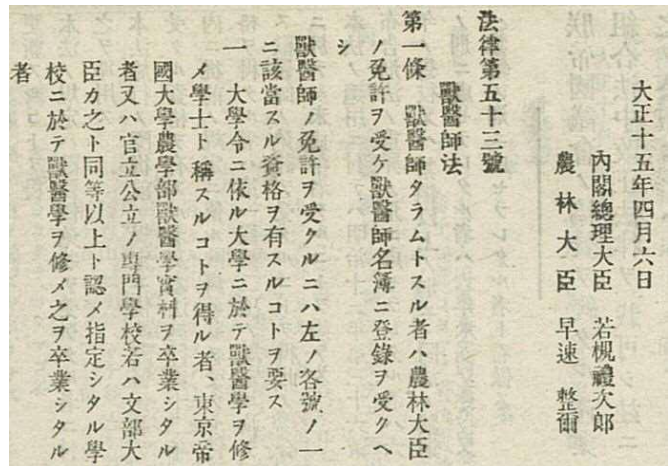
散髪は交代で行う

(『山口県立山口農業学校百年史』より)

# 獣医教育の再興

大正15(1926)年に制定された「獣医師法」により、従来、農業学校卒業生には無試験で与えられていた獣医師免許が、専門学校以上の卒業生でなければ交付されないこととなった。(ただし経過措置として施行後12年以内は旧規則による免許資格が認められた。)これにより、昭和11(1936)年、小郡農業学校開校以来の歴史を持つ、県下唯一の獣医師養成機関であった獣医畜産科の獣医部門が廃止された。

獣医師法は獣医学教育の程度を高めることを法に明示し、獣医師免許資格の質を向上させたが、一方で獣医師の著しい不足を招いた。

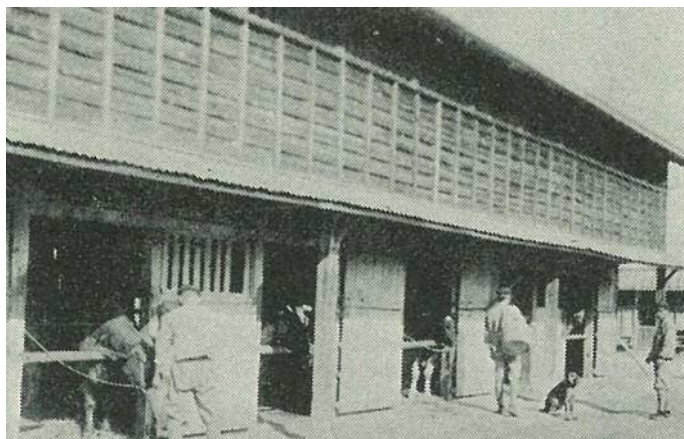


獣医師法(大正15年公布)

## 第二部獣医科の設置

昭和12年以降、獣医師は海外へ多数動員された。食糧増産の技術者とともに、獣医畜産の技術者養成もまた、緊急の課題であった。特に獣医師の養成、確保は国防上、その必要性が強く認められた。

昭和14年4月、獣医師試験規則が制定され、農業学校に第二部獣医科の設置が認められた。これにより山口県立小郡農業学校は修業年限2か年、定員40名の「第二部獣医科」を新設し、獣医師試験の受験資格を得られるようにした。



家畜舎(『山口農業高等学校100年史』より)

昭和15年には、深刻化する獣医師不足に対する緊急措置として「獣医手制度」が設けられた。獣医手は、農学校第二部で獣医学を修めたものにも資格が与えられた点や、10年間という期限付きであった点などで獣医師とは異なっていた。小郡農業学校の第二部獣医科でも多くの獣医手が育成された。また、この同年、獣医科も復活し、翌年には畜産科と統合して再び獣医畜産科となった。

# 山口高等獣医学校の創設

昭和16(1941)年以降、特に工、医、食糧増産を目指す農、海外進出を目指す拓殖などの教育機関の拡充や新設が国策として図られ全国的に専門学校が新設、増設された。

山口県でも、昭和19年、畜産技術員の需要増加に対応するため高等獣医学校の設立が可決された。山口県立小郡農業学校の第二部獣医科は、本校から分離独立して専門学校となることとなった。獣医専の設立に際して、県は建築費として140万円の支出を決定し、小郡町も設備費全額となる70万円(現在の金額に換算して約90億円)を地元負担として支出することとした。終戦直前の財政難の時期に町がこれだけの巨額の出資を決めたことから、高等教育機関の設置に関する地元の熱意と努力がうかがえる。

こうして同年4月、山口県立山口高等獣医学校が誕生した。修業年限3年、学科は獣医畜産科のみで入学定員40名の小規模の専門学校であった。なお、旧法により獣医師養成を行ってきた県立農学校は全国で13校あったが、獣医師法制定後、公立の専門学校になったのは、大阪高等獣医学校(昭和17年1月)と山口高等獣医学校の2校のみであった。

この学校の卒業者は、無条件で以下の免許、資格を取得することができた。

- ・学士の称号(学校名を冠する)
- ・無試験での獣医師免許証
- ・高等学校2級、中学校1級教諭(生物、理科、畜産、保健)免許



山口高等獣医学校の生徒と馬

◎文部省告示第百十號  
専門學校令ニ依リ左記ノ學校ヲ設置スルノ  
件昭和十九年一月二十六日認可セリ  
昭和十九年二月二十一日  
文部大臣 子爵 岡部 長景  
名 稱 山口高等獸醫學校  
位 置 山口縣吉敷郡小郡町  
設 立 者 山口縣  
學 科 獸醫學科  
修業年限 三年  
開校年月 昭和十九年四月

## 山口高等獣医学校設置認可の告示

(文部省告示第110号)

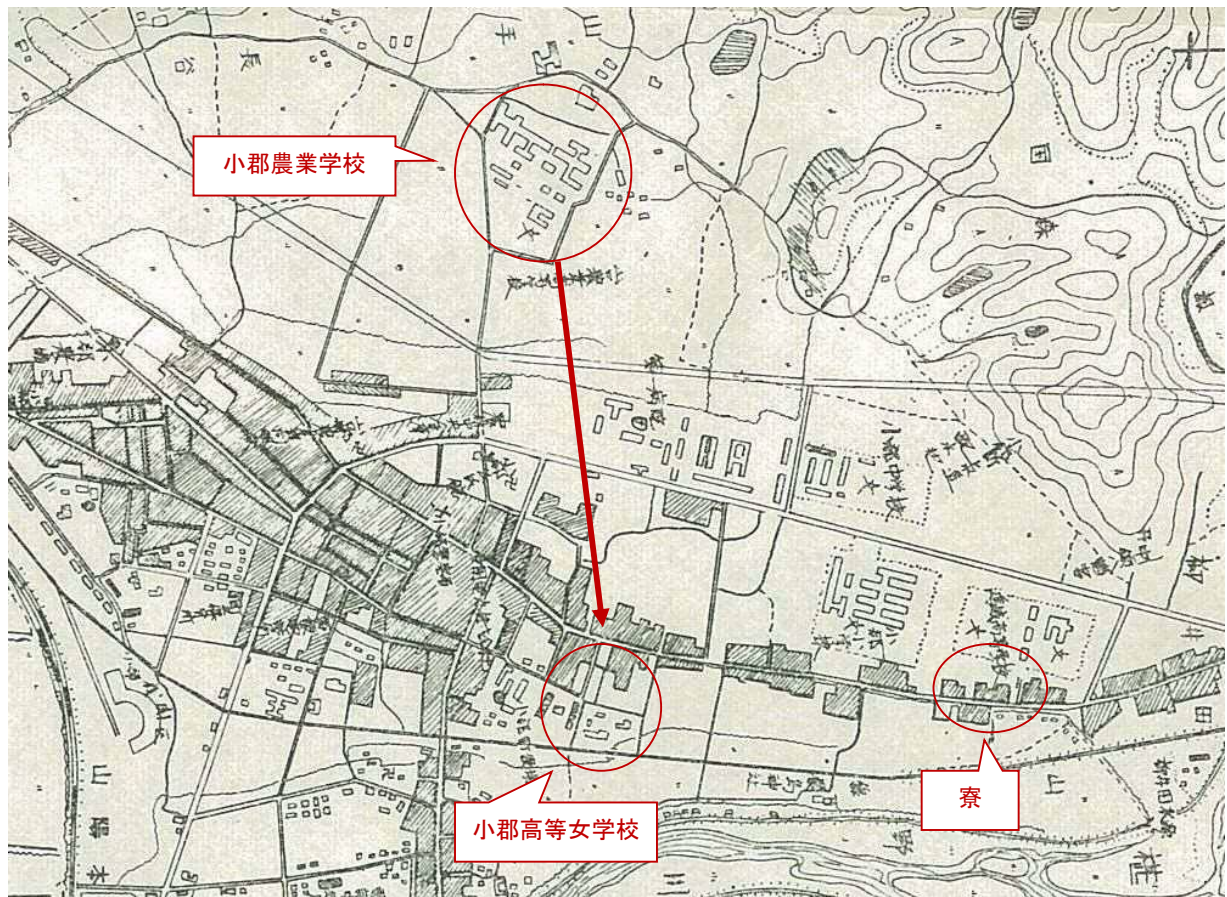
また、優秀な陸軍獣医官を確保、育成する目的で、陸軍省給費の委託学生の制度があった。富山県、高知県、鹿児島県など遠方からの受験生があり、単科の獣医専門学校の高い人気がうかがえる。

昭和19年4月26日、高い競争率の中から選ばれた55名(4名の委託学生を含む)の新入生を迎え、山口高等獣医学校の開校式及び第1回入学式が行われた。

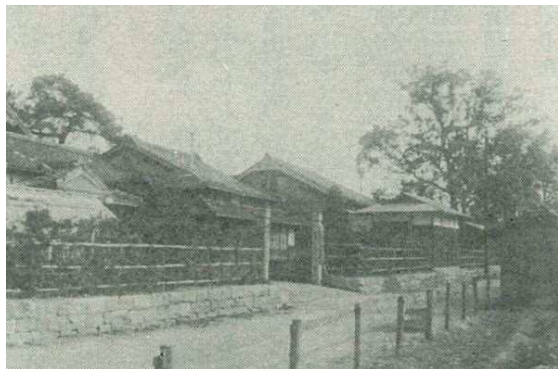
# 校舎移転

創立当初は、校舎の新築もならず小郡農業学校に同居していた。小郡町新丁にあった小郡高等女学校が小郡農業学校に合併され農業科女子1部・2部となって移転したため、その校舎を仮校舎とすることとした。7月10日に移転し、午後には移転式を挙行了た。

移転当時は、食糧や物資が不足している時代であったため、校舎はあっても、顕微鏡をはじめとする器材、学生の実験、実習室もなく獣医学校としての設備が整っていなかった。グラウンドも狭小ではあったが、後には1～3期生でバレー、ソフトボール、軟式野球、陸上競技が始まり、高専陸上競技で優勝者も輩出した。



小郡町市街図(『小郡町史』より)



山口高等獣医学校仮校舎  
(小郡高等女学校校舎)



山口高等獣医学校(山口獣医畜産専門学校)跡

# 学生生活

## 開校当時の教育

山口高等獣医学校の開校当時は、すでに教育が十分に行える状態ではなかった。

初代校長の海老原初太郎は農林省馬政局に勤務していたが、県知事の懇請により、昭和19(1944)年7月に山口高等獣医学校の校長として着任した。発足当時の教員には井原英一（解剖・病理学）、山下与四蔵（家畜）、田中守（体育・生徒主事補）、池上至（独語・人文・道義・生徒主事）、溝口五郎（化学・生理学）、青木猷彦（化学）がいた。

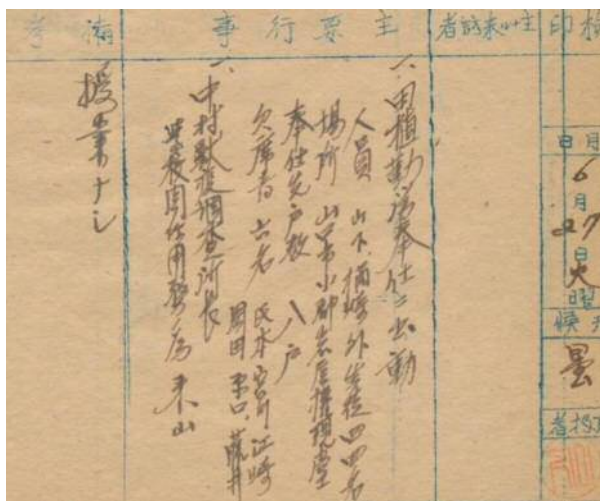
物資不足の中、教科書やノートもままならなかったが、解剖・病理学、家畜学、体育、独語、人文学、化学などの授業が行われた。解剖・病理学担当の井原先生の授業では、ラテン語の原名が連なり、多くの生徒が頭を悩ませたという。当時は日曜日にも授業を行うことがあった。

また、解剖実習の他に牧場、農場での実習も行われた。小郡町の北東、八方原に学校実習園があったが、戦時下の食糧不足もあり1～3期生は牧場実習の代わりに草刈やサツマイモ、南瓜、大豆の植え付けを行った。

昭和20年8月、食糧事情の悪化と赤痢患者の発生で栄養状態が極限に達したため、ついに授業は中止に追い込まれた。



当時の教科書(旧農学部所蔵)  
当時は馬学が中心であった



(上)草刈り実習の様子

(左)昭和19年校務日誌

小郡岩屋権現堂に田植勤勞奉仕に出動した記録  
当時は勤勞作業も多く行われた

## 寮での生活

第1～2期生については、1年生の間は全寮制であった。寮は本校舎から徒歩5～6分の蔵敷通りにあった旧制鴻城中学の寄宿舎の跡地で、粗末な木造の建物であった。寮は班単位で規律正しい生活だったという。別棟に食堂があり、主食は白米に、麦、コウリヤン、大豆、大豆粕など種々雑多に混合されていたもので、味噌汁は塩味に少々色がついている程度であった。食糧不足のため、賄い方は大変な気遣いや苦勞をしたようであるが、成長盛りの学生は食事が足りず、寮を抜け出し近所の芋畑に忍び込み暗がりでもさぼったという。

昭和20(1945)年、赤痢患者の発生により、運営が困難となったため9月10日で寮は閉鎖となった。

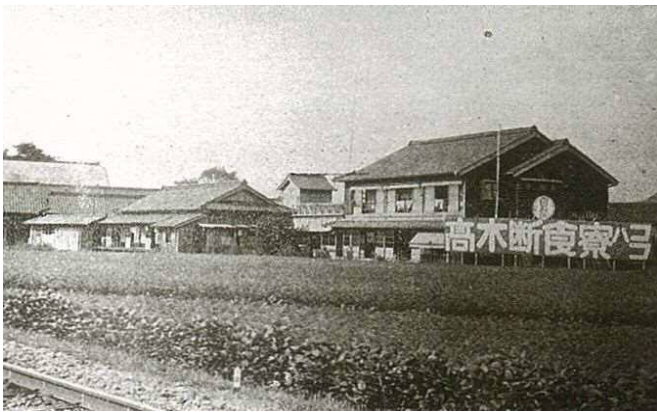
(右)昭和19年寄宿舎炊事部日計表

「一人出征に付夕食より差引」とあり、時代がうかがえる

4月18日 水曜 炊事部日計表

品名	現在高	一日量	残高	献立	備考
米	211.63kg	17.4kg	194.23kg	朝飯	寮生全員五三名 合帯人員朝五三名 暮五二名 夕五二名
麦	21.75g		21.75g	味噌汁	
粉				味噌汁	
豆				味噌汁	
豆					
芋					
調味料					
味噌	9貫7匁	550匁	9貫7匁	夕飯	寮生全員五三名 合帯人員朝五三名 暮五二名 夕五二名
醤油	3斗14	1斗	3斗	味噌汁	
塩				味噌汁	
燃料	100把	5把	95把		

## 下宿での生活



高木断食寮(山口県立山口図書館所蔵『高木式六法衛断食体験録』より)

高木式断食療法で全国に名を知られ、県内外から多くの入寮者があつた

断食療法に加え食事療法、生体療法なども行われていた

2年生になると下宿生活が許された。食事は賄屋が多かったが、一日中お腹を空かせた学生たちは、町で食べ物屋を探して歩いた。物はなくても心は豊かで、ゲーテに興じ、ハイネを愛し、ニーチェを論じ、古本屋で見つけた哲学書を回し読みもした。

学校近くの高木断食寮にも多くの学生が下宿をしていた。断食して療養に専念するこの建物の一室で、ある学生がすき焼きをしたため、窓を開放していた患者の部屋に食欲をそそる香りが流れ込んでしまいひんしゆくをかったというエピソードもある。



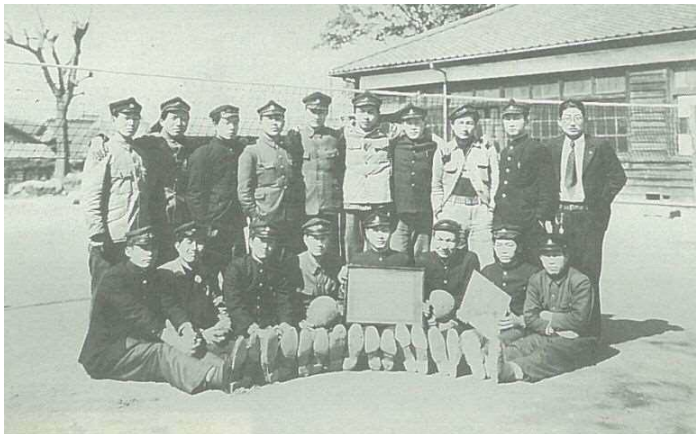
## 学生生活のひとコマ



校舎前にて



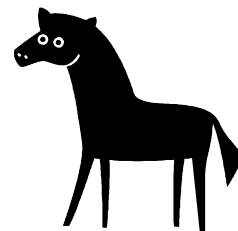
第2回記念開校祭



(左上)高木断食寮にて

(上)バレー部

(左)小郡駅構内にて



## 山口獣医畜産専門学校へ改称

昭和20(1945)年、実業、技術系高等専門学校が全国一律に専門学校と改称することにもない、山口獣医畜産専門学校と改称した。

終戦後は社会の混乱と共に学園生活も乱れ、翌年4月には編入者を含めても学生数が40名を下回る状態となった。その後昭和23年末をもって、下関市の長府校舎へ移転となり、一時は廃校の危機に瀕したが、翌年には新制山口大学として移行することとなる。

# 工業教育の芽生え

## 実業教育としての工業学校

幕末、長州五傑の一人としてイギリスに密航した山尾庸三は、帰国後、新政府で工学に関する重職を歴任し、日本の近代工業の確立に尽力した。明治4(1871)年、山尾の提唱により工学寮が設立され、工業教育による人材育成にも力がそそがれた。

山口県では藩政期以来、農業を中心とする産業構造が続いていたが、明治10年代に入り、県の勸業施策として製茶・製紙などの諸産業が推進される一方、県内各地で新事業が興り、新産業の開発と育成の素地が築かれた。

明治30年代に入ると、国内産業の飛躍的な発展から工業教育を含め、実業従事者の組織的な養成が必要とされた。明治32年2月、文部省は実業学校令を公布し、工業学校・農業学校・商業学校・実業補習学校を法制上の実業学校とした。

これにともない、県は明治36年7月、光市室積に県立工業学校を設置し、造船及び機械工業従事者の養成を目指した。明治37年、日露戦争が勃発し、県は財政見直しのため工業学校の縮小を図ったが、地元を受入産業がなく卒業生の多くが他県に就職していたことから、大正3(1914)年には廃校となり、その施設は第二師範学校に転用された。

## 県立工業学校の再興

第一次世界大戦後の産業の発達により、実業教育の必要性はさらに高まり、大正9年には実業学校令の改正が行われた。

この頃、山口県でも一旦は廃校となったものの、郷土の産業人の大きな支援を受け、県立工業学校が再興された。

大正8年、県は工業学校の設置を決議した。これをうけて宇部では宇部共同義会が寄附金を募り、設立に必要な30万円を県に寄附した。これにより大正10年、山口県立宇部工業学校が設立された。宇部共同義会の期待に応えるべく、すぐれた技術者を育成するため、入学は非常に狭き門であり、卒業も難易度は相当に高かったという。

一方、下松では久原房之助が大規模工場建設を計画していたが、戦争の影響を受け頓挫していた。そのため、地元への謝罪と工業技術者の育成を意図して、大正8年、久原は工業学校設立費用として33万円を寄附した。これにより、大正10年、山口県立下松工業学校が設立された。



開校当時の下松工業学校  
(『久原房之助』より)

# 私立の工業学校 宇部徒弟学校

大正3(1914)年、室積の県立工業学校が廃校となった年、工業都市として発展してきた宇部で、渡辺裕策が、経営する炭鉱の機械部門である新川鉄工所を創業し、同時に下級工業技術者の養成を目的として私立の宇部徒弟学校を設立した。

学校の設立資金と運営費は全て渡辺が負担した。また、生徒の授業料は一切免除、学習に必要な書籍・器具類は貸与し、実習手当も支給した。寄宿舎も設置されたため、入所生の負担は食費10円のみであった。その後、宇部工業学校と改称するが、大正10年の県立宇部工業学校設立に伴い、長門工業学校と改称した。



渡辺祐策

(『素行渡辺祐策』より)

## 宇部共同義会と渡辺祐策

山口大学工学部のある宇部は、現在は工業都市として知られているが、その発展の礎を築いたのが、村民で組織された宇部共同義会と渡辺祐策である。

宇部共同義会は明治19(1886)年に創設された。当時の宇部は人口6千人の一寒村にすぎなかった。宇部で石炭産業が盛んになったのは、維新後、萩藩の家老だった福原家が、他村に渡った採掘権を宇部のために買い戻したことに始まる。宇部の人々は権利を譲り受けて共同で管理する宇部共同義会を設立、各炭鉱の経営は、「宇部式匿名組合」と言われる独特のシステムで行われた。これは、一人の頭取に絶対的な信頼を置き、権限を与え、給料は全員同額で、食事も炭鉱側が賄うというものである。

その後、石炭の需要の高まりにより共同義会は、相当な財を蓄える財団(大正12年に法人化)に成長し、郷土の公共施設・社会福祉・教育文化の3つを主な対象として巨額の寄附活動を行った。中でも教育には特に力を入れ、各地に新設された小学校の講堂や全国初となる村立の中学校・村立宇部中学校の建設、県立宇部工業学校の誘致などに、その財を投じた。また、昭和14年には、山口大学工学部の前身である宇部高等工業学校創設に際し、常盤台の敷地3万8千坪を建設用地として宇部市から国への寄贈という形で用意した。宇部共同義会は、昭和28(1953)年、宇部市立図書館建設費に全財産を寄付し、その歴史に幕を閉じた。

渡辺祐策は、宇部共同義会の中で最も成長した沖ノ山炭鉱の頭取を務めた人物である。炭鉱経営を軌道に乗せると「埋蔵量に限りのある石炭を掘り尽くす前に、その富を無限の技術に転換しなければならない」との理念から、炭鉱経営で得た資金を元に、宇部新川鉄工所、宇部セメント製造、宇部窒素工業(これら3社と沖ノ山炭鉱が合併して宇部興産株式会社となる)、宇部電気鉄道(現在の JR 小野田線)などを次々と起業し、教育機関や上水道、港湾等の社会基盤の整備にも尽力し、宇部村発展に大きく貢献した。

# 官立宇部高等工業学校の創立

## 官立高等工業学校の誘致

昭和の初頭、国内には工業に関する高等技術者を養成する専門教育機関として、旧制中等学校から直接入学できる官立の高等工業学校、あるいは専門学校が全国に18校存在していた。昭和13(1938)年、戦局が拡大する中、技術者の拡充を図るため、文部省は新たに7つの官立高等工業学校を増設することとした。国内での地理的な配分を考慮した結果、山口県に新設するよう立案された。

当初は、政治的・教育的環境の観点から、山口市が候補地とされたが、山口市は文部省の要求する土地や資金を提供し得る財政的余裕を持たなかったため、結局断念した。そこで当時、新進工業都市として発展の段階にあった宇部市が、鉾工業に必要な人材の確保という点からも工業に関する高等教育機関の設置を希望し、高工誘致に名乗りを上げた。

建設用地には、宇部市が一望できる広々とした高台(現在の常盤台)が候補として選ばれ、市の交渉の結果、約4万坪にも及ぶ広大な土地が確保された。宇部市からの寄附(土地のほか、学生寮、教官官舎の建築費及び現金40万円)や地元企業からの寄附(現金75万円)の申し出を受けた県は、さらに現金40万円を添えて政府に高工設置を願い出た。

これにより昭和14年、修業年限3年の官立宇部高等工業学校(以下「宇部高工」という)が誕生した。同時に室蘭、盛岡、多賀、大阪、新居浜、久留米にも官立の高等工業学校が開校した。



昭和13年頃の宇部市

## 学生募集と入学式

昭和14年(1939)5月23日には生徒募集要項が告示された。募集人員は機械科、精密機械科、工作機械科、鉦山機械科、採鉦科の5学科各40名で合計200名、入学試験は6月に宇部と東京で行われた。

学生は広く全国から集まり、7月11日、第1回入学式が仮校舎の鵜之島小学校の講堂で挙行された。

入学試験日が通常の入試時期より遅くに設定されたことで、旧制高校の入試に失敗した者が多数入学したこともあり、他の既設の高工に比べ、旧制高校に近い自由闊達な雰囲気があった。



鵜之島の仮校舎

## 初代校長 福井私城と教師陣

文部省は宇部高工設置準備の世話校として東京工業大学を選んだ。その責任者が東京工大予備部主事で理学博士の福井私城であった。

福井校長は当時の宇部では唯一の勅任官(明治憲法下で勅旨により任命される高級官吏)で、官位は県知事より上であったが、宇部の人々は官立高工の校長を旧制中学校の校長くらいにしかなかった。そのため、宴会の席で福井校長が一番上座に座ったことに、皆大変驚いたとのエピソードがある。

宇部高工発足当時は、機械、鉦山、基礎の三部制がしかれており、笠松儀三郎、樋口誠一、松山英太郎がそれぞれの部長に就任した。基礎部を独立した部として位置づけたのは、高工教育に数学、物理、化学などの基礎科目のみならず、人間形成に必要な人文系学科をも重視した福井校長の英断であった。



福井私城

## 校章と教育目的

宇部高工の校章の図案は学生たちから募集された。

福井校長は、この校章の形から宇部高工の教育目的を「真・善・美」とであるとまとめた。



## 新校舎の完成—鵜之島から常盤台へ

昭和14(1939)年11月、宇部高工の校舎、官舎、寮の第一期工事が起工された。工事費は21万2千円であった。翌年4月、新校舎が常盤台(「常盤台」という呼び方は初代校長による)に完成し、新学期の授業は新築の校舎で行われることとなった。運動場の整地は、すべて学生による奉仕作業で行われた。



常盤台新校舎への移転

学生は自分たちの机に竹棒を差し、2人1組で肩に担いで鵜之島より常盤台まで歩いて運んだ。

その後も建設は急ピッチで進められ、17年春には、本館や講義室、実習工場、実験棟などが完成し、校門などの付帯工事を残すのみとなった。工業に関わる人材の育成が国の急務とされたこともあり、人材や資材が不足がちであったにもかかわらず、異例の建設スピードであった。

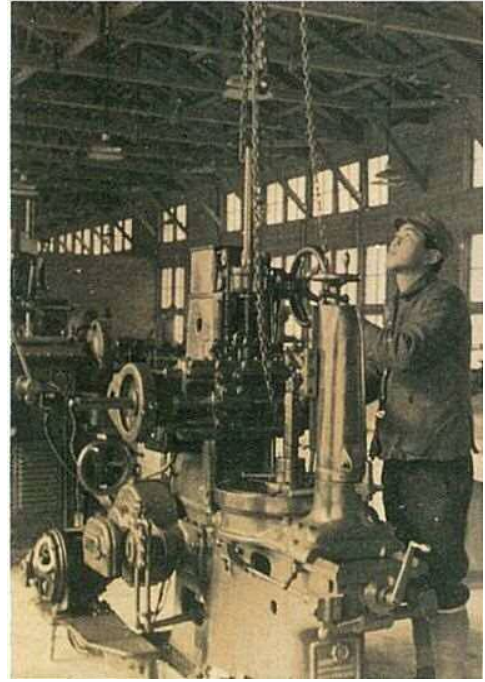


完成した新校舎

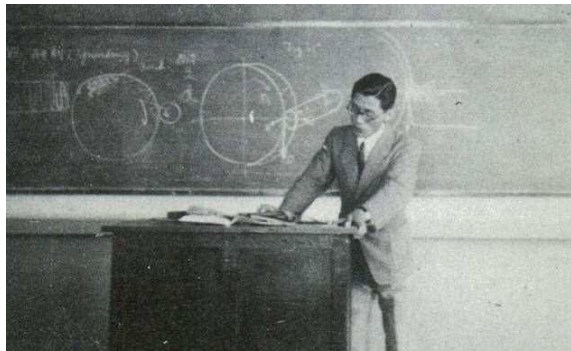
## 開校当時の教育

宇部高工の発足した昭和14(1939)年には大学、高校、専門学校の修業年限の短縮が決定され、宇部高工の第1期生、2期生も繰り上げ卒業となった。昭和17年には工業化学科(定員40名)が新設され、その後毎年、機械系・鉱山機械、採鉱学科は大幅な増員を続けた。機械系技術者の増強やエネルギー政策への重点化など、時代の要請が教育にも大きな影響を与えていた。

履修科目には全科共通のものと各科の専門のものがあり、授業はクラス単位で行われた。全科共通の科目の中には、3学年全てに課せられる「修身および国民科」など当時の世情を強く反映したのものもあった。また、機械科や採鉱科では、外国語として中国語の履修が課せられていた。

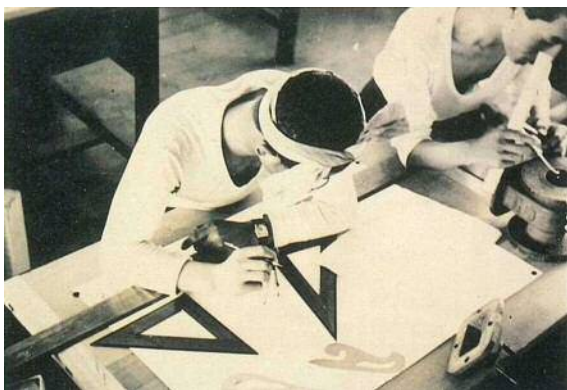


実習の様子(昭和17年頃)

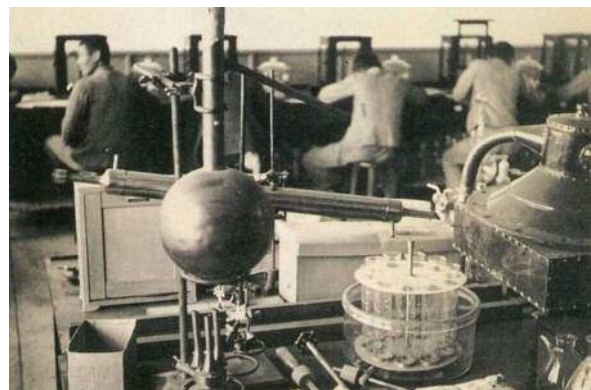


講義風景(昭和16年頃)

昭和16年12月、第1期生163名が常盤台を巣立った。昭和19年には、工業教員養成所(機械科)を附設、宇部工業専門学校へと改称した。1期生から3期生までは2年半の修業年限ながら、ほぼ時間通りに授業がなされたが、秋以降は、3年生、2年生は工場や鉱山へ勤労働員として駆り出されたため、現地での出張授業も行われた。



製図実習(昭和17年頃)



化学天秤測定(昭和17年頃)

# 学内行事・学生生活

## 名物行事 10里マラソン

毎年2月11日には40キロメートルのマラソン競技が催された。琴芝八幡宮裏より木田を経て舟木まで走り、引き返して西宇部から市内に入ってゴールインするというコースが選ばれた。時間を競うほか、忍耐力を養うということで、完走することが要求された。この競技には教官たちも仲間入りした。



渡辺翁記念館前を通過



正門へゴール

## 学生生活の様子

当時の学生は蛇腹の学生帽に黒の詰襟が標準的なスタイルだった。靴が正式だが、物資不足のため杉下駄がすり切れて割れるまではいた。夏は学生帽の代わりにカンカン帽をかぶることが許された。学校に至る田んぼ道を白いカンカン帽の列が揺れて登ってくるのは微笑ましい初夏の風物であった。



朝礼

毎朝、朝礼があり、学生・教職員全員が参加しラジオ体操などをした。



売店の様子

物資不足のため入荷時には行列ができた。



## 鶉之島寮から常盤寮へ 青春を謳歌した日々

昭和14(1939)年7月、入学後1年間は全寮制のため、新入生は鶉之島の仮寮に入居した。学生はこの新設の高工を、いかに伝統ある既設の学校に負けないものにするか、毎夜、寮室で議論に明け暮れ、挙句、三々五々意気投合して町に繰り出し気炎をあげたという。

昭和15年、鶉之島の仮寮より引っ越した寮生たちは、新築の常盤寮で生活をはじめた。各部屋3、4名が起居をともにし、寮生の中から選ばれた全寮総務が寮の自治を統括した。学校側では、寮生の監督、相談相手として、舎監や生徒主事、生徒主事補等がその任にあたった。

昭和17年頃には、常盤寮は第1から第6寮が建築され、西日本有数の収容人員を誇る学生寮となっていた。2月、新築まもない第6寮が火災を起こしその数部屋を焼失した。原因は当時寮内で禁止されていた、タバコの不始末によるものであったらしい。



トランプをする寮生(鶉之島寮で)



完成した常盤寮(1・2・3寮)



日曜日の寮掃除

## 寮祭

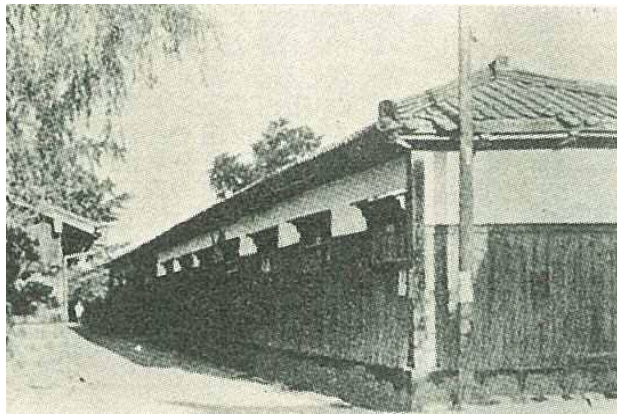
寮の行事は、何といても寮祭であった。京都帝大名誉教授の愉快的講演あり、のど自慢大会あり、各科苦心の熱演劇もあって、夜の更けるのも忘れて楽しんだ。学生たちは、自由闊達に、エネルギーに、学校生活を送った。



# 医学教育の芽生え

## 防長医学教育のはじまり

享保4(1719)年、萩藩校「明倫館」が創設され、藩士子弟の教育は大きく進展した。教授陣の中には医家もいたが、医学教育は行われていなかった。19世紀に入ると三田尻で、佐伯玄厚、杉山宗立らによって蘭学の研究がはじめられ、文政6(1823)年には、徳山藩が藩校「鳴鳳館」内に医学館を併置して医学の講義を開始した。ドイツの医家シーボルトが長



好生堂長屋門 (『萩市史』より)

崎に渡来したのもこの年であった。

萩藩では、天保10(1839)年、大阪や江戸で蘭学を修めた青木周弼が藩医となり、翌年、医学所が設立され、医学教育が行われるようになった。この医学所は「好生館」、「好生堂」と改称し、明倫館に移された。慶応2(1866)年には、藩政府の山口移転にともない、医学教育機関である好生堂も山口に移され、山口好生堂と萩の分館に分かれた。

## 県立医学校の創設と廃止

明治維新後、新政府によって旧体制から新体制へとさまざまな再編が図られる中、医科学教育にも変化がもたらされた。明治5(1872)年には、全国に先駆けて医術試験である「壬申考試」が山口県で施行された。同年、県は下関に赤間関医学校を開設した。

幕末に医学教育の中心をなした、山口好生堂は山口県立山口医院と改称し、明治7年に山口から三田尻に移され、山口県立華浦医学校となった。明治9年、県立赤間関医学校が廃止され、華浦医学校に統合されたが、翌年には県の財政難によりこの華浦医学校も



華浦医学校の校舎と生徒

(『山口大学医学部50周年記念誌』より)

私学化された。明治13年に、華浦医学校は山口県医学校として再興したが、明治16年には廃校となった。

明治20年、県内各地の医師たちは県の医療体制の強化と医療水準の向上を図るため、山口県医会大集会を開催し、明治42年には山口県医師会を設立した。しかしながら、医師養成のための教育機関を復活させるまでには至らなかった。

# 山口県立医学専門学校

## 山口県立医学専門学校の創立

明治期に県立医学校が廃止された後、県内の医学教育機関の再興はかなわないままに約60年が経過したが、次第に医師の必要性は高まり、文部省は全国各地に医学専門学校の設定を計画した。このような状況を受けて、昭和19(1944)年2月、県は県立専門学校の設定を可決した。同年4月、宇部市下宮地(現在の北琴芝)に山口県立医学専門学校(以下「山口医専」という)が設定された。なお、この年、北海道、福島、神奈川、山梨、京都、大阪、兵庫、福岡に、翌年には、秋田、奈良、和歌山、広島にそれぞれ公立医学専門学校が急造されている。

山口医専の設立にあたっては、宇部興産株式会社会長で、県医師会会長でもあった渡辺剛二(渡辺祐策の次男)の絶大な尽力があった。渡辺は、設定資金として50万円もの寄附を行い、各会社や個人有志、山口県下の医師会、歯科医師会、薬剤師会等の医療関係からも寄附を集めた。山口医専の設定資金の総額は250万円とされていることから、渡辺の寄附がいかに巨額のものであったかがうかがえる。また、山口医専の附属病院には、沖の山同仁病院、東見初病院、市立伝染病院が充てられたが、同仁病院と東見初病院は、渡辺が会長を務める宇部興産株式会社が設定した病院である。



渡辺剛二

山口医専の創立により、60年の間途絶えていた山口県の医学教育の歴史に再び灯がともされることになった。昭和20年には2期生が入学したが、4月に入学式だけが行われ、始業式は7月1日となった。講義もままならない状況の中、終戦を迎えることとなった。



旧校舎全景

## もう一つの医専設立計画

昭和19(1944)年の山口医専設立の数年前、実は渡辺剛二らによって、私立医専の設立計画が立てられていた。この計画の中心人物は、渡辺剛二と沖の山同仁病院院長の水田信夫であった。

水田は田布施町に生まれ、京都帝国大学医学部を卒業。昭和14年、勤務していた京都帝大医学部を辞職し、沖の山同仁病院の院長として着任した。水田は、地元で医学校を設置する必要性を強く感じ、京都帝大医学部の内野仙治に相談するとともに、病院の経営責任者でもある渡辺にも医専設立の必要性を熱心に説いた。水田の話を理解した渡辺は、協力を惜しまず自らも設立運動の先頭に立って活動した。



水田信夫

昭和15年、渡辺は水田や小郡で医師をしていた山本辰隆と発起人となって「宇部医学専門学校設立要項」を作成し、県下の行政要員や医師会会員などに配布した。この設立要項には目的や生徒定員、学科、さらには寄附金の払込予定や経営方法や予算などが、かなり具体的に記されており、医専設立計画に対する力の入れようが見てとれる。(設立要項の詳細については、吉井善作、粟屋和彦、山口県医学教育小史(3)幻の宇部医学専門学校、山口医学、1984、Vol33、No5、p.397-407。を参照)



昭和初期の沖の山同仁病院  
(『素行渡辺祐策翁』より)

しかしながら、周囲の反応は芳しくなかったようである。結局、この設立計画は実現せず、昭和19年の県立医専の設立をもって、ようやく実を結ぶこととなる。山口医専の設立にあたって、渡辺が積極的に尽力したのも、かつてかなわなかった医専設立計画があったためでもある。昭和20年、水田は同仁病院院長と山口医専の講師を兼任。昭和22年からは山口医専の専任講師として、医師の養成に尽力した。

### 俳人・水田のぶほ

医者として大きな功績を残した水田信夫には、俳人としての顔もあった。京都帝大医学部の師である松尾いわおに勧められ俳句と出会い、晩年には句集『二人静』を刊行。俳人の育成をはじめとし、山口県俳壇の輪を広げ、振興にも尽力した。



山口大学医学部構内にある句碑

## 初代校長富田雅次と建学の精神

昭和19(1944)年、山口医専の初代校長として台北帝国大学医学部教授であった富田雅次が着任した。富田校長は、知事に対し以下のような教育方針と経営計画を示した。



富田雅次校長

1. 昭和の松下村塾を建設したい。  
学生訓育は学生と教師が同居し、寝食を共にすることを第1要提とする。
2. 軍人医学の速成教育を念願とし、優秀なる内外科教官を迎え外科手術と傷病手当の実習を主とし、内科診療には結核と伝染病に主力を置くこと。
3. 戦争の長期に及ぶことを思い、食糧問題の危機に備えて蛋白化学研究所を新設すること。
4. 宇部地方の産業開発に即応し産業医学研究所を新築すること。
5. 他大学に模倣することなく、常に率先して独創的計画を樹立すること。

これら諸計画遂行にあたっては、全責任は校長1人が負担すること、事務当局には常に有能な人物を差し向けること、人事問題と学生入学に関して一切外部からの干渉は受けないことを条件として、校長就任を引き受けたという。

富田校長以下、諸教授は、学生と起居を共にし、文字通り松下村塾に倣う教育を実践した。終戦後、富田校長は軍医養成校の長としての責任を取って退官した。

## 創立当時の教授たち



中村正二郎教授  
医化学



尾曾越文亮教授  
解剖学



力武一郎講師  
ドイツ語



斉藤幸一郎教授  
生理学

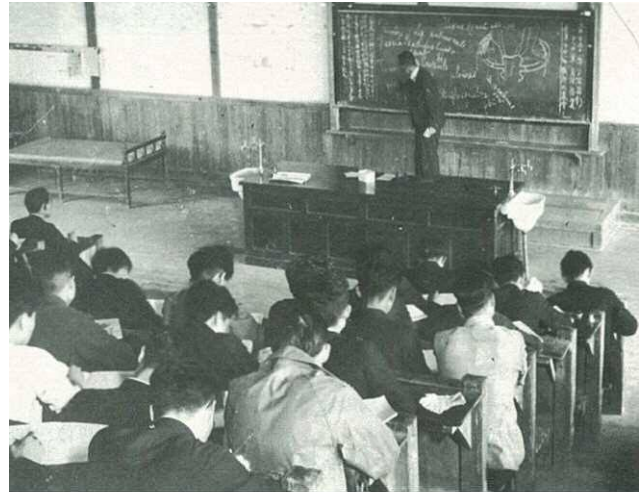


吉良貞敏教授  
同仁病院から転任

# 学校生活・学生生活

## 授業・実験

創立当初の講義は毎日ドイツ語、医化学、解剖の繰り返しと集中講義の連続であった。また、現役将校による軍事教練も週2時間必須であった。戦時下のため、研究設備はおろか、学習実習器具さえなかった。参考書などは皆無で、学用品、筆記するノートも図書館もなかった。学生は時折、書店の店頭に見える配給の書物をむさぼり読んだ。そのような中、実験器具として備えられた顕微鏡は当時自慢のもので、空襲があるたびに奉安殿に格納していたという。



階段教室での講義

昭和20(1945)年7月2日の空襲により、宇部の街は一面の焼野原となった。焼け残った山口医専の校舎には負傷者が収容された。医師は外科の医師1人のみであったため、学生達も、焼け出されて同居していた同仁病院の看護婦に教えられながら治療にあたった。



病理解剖の実習室



解剖実習室

## 長崎原爆被害調査団派遣 昭和20年9月12日～9月20日



被爆資料を手に富田校長と家森教授

昭和20年8月9日、長崎に原爆が投下された。広島が壊滅状態のため長崎に行くことのできた大学は九大、熊本医大と山口医専の3校であった。山口医専からは富田校長以下、教授6名、助教授1名、学生18名が直ちに長崎に赴き救護、調査にあたった。当時の山口医専は解剖刀さえない状態で、出発間際に闇市で包丁を買い求め、唯一の解剖刀として持って行ったという。

## 寮生活

創立当時の山口医専では市内の旅館や民家などを寮として使用しており、それぞれ学生が分散して生活していた。



第1寮(宇部鍼灸所)

## 運動会・仮装行列

昭和20年4月25日、第1回開学記念として4地区(山口東部、山口西部、広島・関西、九州・関東)対抗で、野球と運動会を行った。

また10月には、終戦直後の沈滞するムードの中、運動会を行った。多くの市民がつめかけ、特に仮装行列はその後宇部市の名物となった。



第1回開学記念運動会の様子

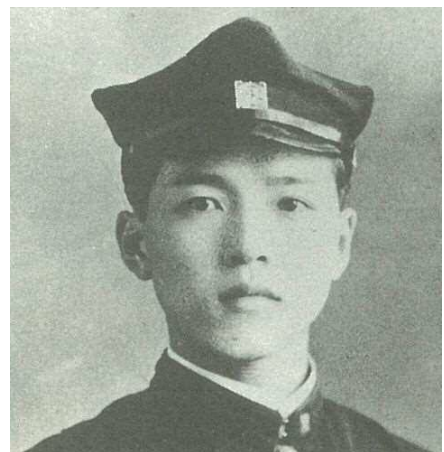


仮装行列

## 角帽の医専生

創立当時は、戦争中のため衣料もなく、黒の学生服などはあっても古着で、大体の学生が中学時のナツパ服(薄青色の労働服)であった。それでもセルロイド製の校章のついた黒の角帽・白衣だけは開校時に教師たちの苦勞によって準備された。

当時、宇部市には官立工業専門学校もあり、その学生は丸帽をかぶっていた。それに対して山口医専の学生は角帽であり、一種のトレードマークのようになっていた。校章のデザインは富田校長、中村、力武、尾曾越教授4名の合作であった。



(左上)校章(『霜仁会歴史誌』より)

(上)当時の医専生

# 混乱の時代を経て、そして…

## 各校の勤労作業

### 山口高等商業学校 (山口経済専門学校)

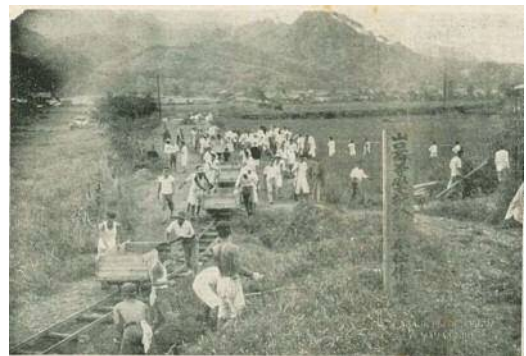
昭和13(1938)年に集団勤労作業が開始され、夏期休暇中に全生徒は6日間仁保川支流の河川改修、築堤作業に従事した。昭和14(1939)年夏、文部省主催で「興亜学生勤労報国隊」が組織され、山口高商からは助教授1名、生徒6名が参加した。また昭和17年には、修業年限が6カ月の短縮となり、教練、勤労作業の時間が著しく増えていった。



樫野川改修(昭和14年)

### 山口高等学校

旧山高でも、樫野川の堤防強化作業が実施された。昭和16年には、稲刈奉仕や蕎麦の刈入れが行われている。また、1年生は1週間、広島へ奉仕作業に出掛け、団体訓練、時局認識等の体験をした。昭和19年、3年生が工場に出動し、翌年には、2年生が彦島へ、新入生は防府市の協和発酵へと動員された。



集団勤労作業の様子(昭和15年)  
(山口高等学校團誌「鴻南」1号)より)

### 山口県師範学校 (山口師範学校)

昭和13年に開始された集団勤労作業は、その後恒常化され、出征軍人家庭の田草採り、道路の修繕なども行っていた。師範学校の勤労働員は教員養成の重視から特例として扱われてきたが、しだいに戦局が苛烈を極め、昭和19年には、師範学校生徒でも例外なく勤労働員に駆り出されることになった。

昭和20年4月、戦前最後の師範学校生徒が国民学校高等科を卒業して入学した際、本科生徒はほとんど学外勤労に動員され、残った予科生徒にも授業らしい授業はなく、山口大神宮奥での農場開墾作業等が毎日のように課せられた。



下関石切場での集団勤労作業  
(昭和14年7月21日～25日)



## 宇部高等工業学校(宇部工業専門学校)

工場や鉱山での集団勤労作業の傍ら、宇部高工では軍事教練が行われた。萩20里夜間行軍は体力の限界に挑むもので、歩兵銃を担ぎ、砂袋の入った重い背嚢を背負っての宇部から萩間の夜間行軍は、後々まで語り草になった。



重い背嚢を背負っての行軍

## 山口県立小郡農業学校

昭和16(1941)年以降、勤労働員は農村労働から工場労働へと移行され、修業年限を短縮して産業部門へ配置された。獣医科の生徒48人は、移動家畜診療班を結成し、県下各地に出動し獣医師不足緩和を図った。期間中、診療した牛馬は延べ2,000頭にも上った。



山口県立小郡農業学校報国隊

(『山口県立山口農業学校百年史』より)

小郡農校からも「興亜学生勤労報国隊」として農科、農蚕科、畜産科の10人の学生が安達県薩爾岡(サルト)に派遣された。また、北海道の農業従事者の不足を補うため、「北海道勤労報国隊」として派遣された。

## 山口高等獣医学校(山口獣医畜産専門学校)

昭和19年、大津郡で道路及び橋梁の災害復旧作業などに従事した。昭和20年4月には、入営延期が認められなくなった。そのため専門学校へ改称後の初めての新生50名の大半は、入学後2ヶ月足らずで学徒動員令により、鳥取種馬所(6名)、福岡県種育場(6名)、四国種馬所(5名)に分散動員されたり、軍隊へ応召するなど学舎を離れていった。

## 山口県立医学専門学校

疎開家屋の解体作業や、特牛や大津郡人丸で壕掘作業を行った。また、医学の知識を活かして昭和20(1945)年の宇部大空襲の際には、負傷者の治療にあたり、8月には原爆投下直後の長崎に赴き救護と調査にあたった。

昭和20(1945)年春、県下の高等教育機関は、山口高等学校、山口師範学校、山口青年師範学校、山口経済専門学校、山口県立医学専門学校、宇部工業専門学校、山口獣医畜産専門学校となっていた。そして8月15日の終戦を迎えた。

学園では、学生や教職員が学徒動員や軍隊から徐々に復員した。混沌とした世相ではあったが、暗い戦争の谷間を抜けだした解放感に学生達はひとまずの自由を胸一杯に吸える充実感にあふれていた。

# 年 表

		山口大学前史	県域事項	国内・海外事項
1905年 (明治38)		「山口高等学校」を「山口高等商業学校」に改称。4	山陽鉄道会社、下関～釜山間の連絡航路開始。4 防長女子教育会の創立。2	日露戦争講和条約調印。9
1907年 (明治40)			村立日置農業補習学校設立。4	小学校令改正。義務教育が6年間となる。3 南満州鉄道開業。4
1908年 (明治41)			山陽鉄道、国立鉄道となる。5 皇太子山口行啓。4.8 山口高商英語教師ガントレット、阿武川上流の峡谷美(長門峡)を世に紹介。夏	第2次桂内閣成立。外務寺内正毅。7
1909年 (明治42)			専売局、三田尻製塩試験場を設置。8	種痘法公布。4 伊藤博文、ハルピン駅で暗殺。10
1910年 (明治43)		「山口県立農業学校」を小郡に移転。7	防府電灯・宇部電気・萩電灯会社を設立。	韓国併合、朝鮮総督府設置。8
1911年 (明治44)			下関に秋田商会創立。12	西田幾多郎『善の研究』刊。1 帝国劇場開場(日本初の洋式劇場)
1912年 (明治45) (大正元)			小郡電灯株式会社開業。4 小郡・萩間乗合自動車営業開始。12 山口県教育会、私立防長教育博物館を設置。4	第5回オリンピック(ストックホルム)開催、日本選手初参加。7 明治天皇崩御、大正と改元。9.13
1913年 (大正2)			国鉄山口線小郡-山口間開通。2 郡立大津農林学校(乙種)開校。4 中村高等実科女学校開校。9	桂内閣が辞職(大正政変)。 学校体操教授要目制定(兵式体操を教練と改称)
1914年 (大正3)		「県立室積工業学校」を廃し、「山口県室積師範学校」創設。4 「山口県師範学校」を「山口県山口師範学校」と改称。4	下関に梅光女学院開校。4 山口-三田尻間に乗合自動車の営業開始。11	実業教育費国庫補助法改正。3
1915年 (大正4)		「山口県山口師範学校」に「農業教員養成所」を附設。4	萩-山口間に乗合自動車の運転開始。10	日本第一次世界大戦に参戦(～1918) パナマ運河開通。
1916年 (大正5)	山口高等商業学校	「山口高等商業学校」に「支那貿易講習科」設置。4	県庁舎本館・県会議事堂新築・落成式。11	
1917年 (大正6)		「山口高等商業学校東亜経済研究会」発足。2 機関誌「東亜経済研究」創刊。5	私立防長教育博物館を大典記念山口県立教育博物館に。4	ロシア革命がおこる。11 イタリア、オーストリアに宣戦。
1918年 (大正7)		「支那貿易講習科」を「支那貿易科」と改称。	各地に米騒動が起こる。8 インフルエンザが流行。10	アメリカ、ドイツに宣戦。 スペイン風邪大流行(翌年に向け全国の死者15万人)。10 「大学令」「高等学校令」公布。12
1919年 (大正8)		「官立山口高等学校」を創設。4	寺内正毅死す。11 県立下松工業学校創立。11	パリ講和会議。1 ベルサイユ条約調印。6 野口英世「黄熱病」の病原体を発見。
1920年 (大正9)		「山口高等学校」山口糸米に新築移転。9 「山口県山口師範学校」を「山口県師範学校」、「山口県室積師範学校」を「山口県女子師範学校」と改称。4 「山口県女子師範学校」に「山口県家事裁縫科教員養成所」を併設。4 「山口県立農業学校」に「山口県農業教員養成所」付設。6	山口県医師会設立総会の開催。3 小郡実科高等女学校の開校。4 長門耶馬溪の名を長門峡とあらためる。8 日赤山口病院開院。10 県立宇部工業学校設置。12 翌年4月開校	第1回国勢調査施行。10 「実業学校令」改正。12
1921年 (大正10)	官立山口高等学校	「山口県農業教員養成所」を「山口県立実業補習学校農業科教員養成所」と改称。4 「山口県女子師範学校」に「山口県立女子実業補習学校教員養成所」を併置。4	徳山の海軍練炭製造所を海軍燃料廠と改称。3 宇部市発足。11	農業学校規程改正(甲・乙種区別廃止)。1
1922年 (大正11)			山口線津和野駅まで開通。8 県立山口高等女学校高等科新設。	ワシントン軍縮条約。2 未成年者飲酒禁止法公布。3
1923年 (大正12)		「山口県立農業学校」を「山口県立小郡農業学校」と改称。4	郡立大津農林学校が山口県立日置農林学校と改称。4 山口線、石見益田駅まで開通。山口線全通。4	関東大震災。9.1
1924年 (大正13)			日立製作所笠戸工場、大型電気機関車を製作。4	アメリカ排日移民法成立。7
1925年 (大正14)			宇部線開通(小郡-阿知須)。3 美祢線全通。4	テレビ発明。4 治安維持法公布。4 師範学校規程中改正。4
1926年 (大正15) (昭和元)	山口県立小郡農業学校		皇太子、山口行啓。5 秋吉村滝穴を秋芳洞と改称。9	青年訓練所及び同施行規則公布。4 大正天皇崩御、昭和と改元。12.25

				山口大学前史	県域事項	国内・海外事項			
1927年 (昭和2)	山口高等商業学校	山口県立青年学校教員養成所	山口県立小郡農業学校		小郡実科高等女学校を山口県小郡高等女学校と改称(本科)。4 宇部商業実践学校創立。4	金融恐慌。4			
1928年 (昭和3)						天皇即位。11.10 ラジオ体操放送開始。11			
1929年 (昭和4)						県立図書館鳥越の新館に移転。1 山口市施行。4 防長史談会発足。10			
1931年 (昭和6)						国鉄バス山口-三田尻間営業を開始。5	満州事変始まる。9, 18		
1932年 (昭和7)						萩町を廃し、萩市を設置。7	5・15事件、犬養首相暗殺。5		
1933年 (昭和8)						「山口高等商業学校東亜経済研究所」発足。4	山陰本線全通。2 下関唐戸中央市場の開場。5 嘉村磯多死す。11	国際連盟脱退。3 三陸地方大地震。3 ヒトラー内閣成立(ドイツ) 皇太子誕生。12.23	
1934年 (昭和9)							岩徳線欽明路トンネルの開通。1	室戸台風(死者2500人)。9	
1935年 (昭和10)						「山口県立美業補習学校農業科教員養成所」を「山口県立青年学校教員養成所」と改称。4 「山口県立女子実業補習学校教員養成所」を「山口県立女子青年学校教員養成所」と改称。4	県立田布施農業学校開校。4 徳山町を廃し、徳山市を設置。10	青年学校令・青年学校教員養成所令公布。4 湯川秀樹「中性子理論」を発表。	
1936年 (昭和11)							県立室積高等女学校創立。 防府市設置。8 田島直人、ベルリンオリンピックで三段跳び世界新で優勝。8 大洋捕鯨会社設立。	2・26事件起こる。2 国会議事堂完成。11	
1937年 (昭和12)							中原中也死す。10	日中戦争(日華事変)が始まる。7 南京大虐殺事件。	
1938年 (昭和13)							鴻城中学校小郡に移転。4	国家総動員法公布。4	
1939年 (昭和14)				官立山口高等学校	山口県立青年学校教員養成所	官立宇部工業高等学校	「官立宇部高等工業学校」設置。5 「山口県立小郡農業学校」に第二部獣医科の設置。4 「山口県立女子青年学校教員養成所」防府に移転。10	山口市に天然痘が流行。1-3 関門国道本トンネル起工。5 下松市設置。11 岩国海軍航空隊をおく。12	青年学校令改正。4
1940年 (昭和15)							「官立宇部高等工業学校」常盤台新校舎に移転。4	岩国市設置。4 小野田市設置。11	日独伊三国軍事同盟が結ばれる。 政党解散大政翼賛会。10
1941年 (昭和16)	「山口県立青年学校教員養成所」防府市に移転、女子部と併合。4	満州開拓団600人の壮行式をおこなう。3 山口県立女子専門学校を宮野に創立。4 関門トンネル下り本線開通。7	日ソ中立条約の提携。 東条英機(陸軍)内閣組織。 日本軍ハワイ真珠湾を攻撃。12.8 太平洋戦争が始まる。						
1942年 (昭和17)		1県1紙の事業令により「防長新聞」「関門日日新聞」を合同し「関門日報」の発行。2.1 宇部興産株式会社を設立。3	ミッドウェー海戦で大敗。						
1943年 (昭和18)	「山口師範学校」官立となる。4	山口市バス営業を始める。3	師範教育令改正。3 学徒出陣が始まる。6						
1944年 (昭和19)	山口経済専門学校	官立山口師範学校	県立山口高等獣医学校				「県立山口高等獣医学校」を小郡に設置。1 「官立宇部高等工業学校」を「官立宇部工業専門学校」と改称。4 「県立医学専門学校」を設立。4 「官立山口青年師範学校」の創設(防府市)。2 「山口高等商業学校」を「山口経済専門学校」と改称。4	山口亀山公園の旧藩主銅像を供出。2 山口銀行設立。3 関門トンネル上り本線開通。複数化。9 米軍機の来襲あいつぎ、男女専門学校生徒・中等学校生徒の勤労働員体制が強化される。 山口市と小郡町合併。4	サイパン島で日本軍全滅。7 学童の集団疎開が始まる。 B29東京初空襲。11.24
1945年 (昭和20)							「県立山口高等獣医学校」を「山口獣医畜産専門学校」と改称。3	空襲激化、燈火管制が強化。1 「関門日報」を「防長新聞」と改称。5 山口軍政部発足。9 協和産業・大洋漁業など産業界の操業開始。	米軍が沖縄に上陸。 東京大空襲。3 米軍が広島・長崎に原爆投下。8 ソ連が日本に宣戦、満州に侵入。 ポツダム宣言を受諾、無条件降伏。 右側通行を実施。11
1946年 (昭和21)							河上肇死す。1 山口県庁機構改革。2	預金封鎖と新円切り替え。2 戦後初のメーデー。5.1 日本国憲法公布。(1947年5月施行)	
1947年 (昭和22)							県下最初の婦人警官25名の誕生。2 新制中学校229校いっせいに開校する。5	国民学校を小学校と改称(6.3制)。4.1 第1回参議院選挙。4 新憲法発布。5.3	
1948年 (昭和23)								国家地方警察・自治体警察発足。3	
1949年 (昭和24)	山口大学			山口高等学校・山口師範学校・山口青年師範学校・山口経済専門学校・宇部工業専門学校・山口獣医畜産専門学校を包括して山口大学文理・教育・経済・工・農の5学部を設置。5					

## 参考資料

- ・ 山口大学三十年史 / 山口大学 30 年史編集委員会編 山口大学 1982
- ・ 山口県教育史 / 山口県教育会編 1986
- ・ 日本教育史 / 堀松武一編 1985
- ・ 山口高等商業学校沿革史 / 山口高等商業学校 1940
- ・ 花なき山の・・・ / 鳳陽会編 2005
- ・ 奮発震動の象あり：防長教育史の人びと / 松野浩二著 鳳陽会 2005
- ・ 母校愛に燃えて：山口大学経済学部の濫觴から展望へ / 社団法人鳳陽会 2008
- ・ 山口高等商業学校卒業アルバム
- ・ 山口高等商業学校の東アジア教育・研究と東亜経済研究所 木部和昭 東亜経済研究 67(2), 109-123, 2009  
山口大学東亜経済学会
- ・ 大陸に興奮する修学旅行-山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」(特集 旅遊中国-産業としての観光、文化としての観光) 阿部安成 中国 21(29) 29, 219-236, 2008
- ・ 大正期における専門学校卒業生の海外進出に関する研究-山口高等商業学校の事例にそくして- 井澤直也 東洋文化研究 5, 159-176, 2003 学習院大学東洋文化研究所
- ・ 「五校特約」と山口高等商業学校 王嵐 国際文化学 5, 15-29, 2001 神戸大学国際文化学会
- ・ 清末における商業系留日学生の派遣政策と派遣実態に関する研究 王嵐/船寄俊雄 神戸大学発達科学部研究紀要 9(2), 89-103, 2002 神戸大学発達科学部
- ・ 鴻峯四十年 / 山口高等学校沿革史編集委員会 1962
- ・ 山口高等学校史 / 森田義明・折茂博・石井善之丞編 1968
- ・ 柳桜をこきまぜて：旧制山口高等学校外史 / 東京鴻南会編 1994
- ・ わが鴻南の日々 / 旧制山口高等学校開校六十周年記念事業会編 1980
- ・ 日本教育史 / 三好信浩編 1993 (教職科学講座 第2巻)
- ・ 團誌鴻南 / 旧制山口高等学校報国団
- ・ 山口県師範学校創立六十年史 / 山口県師範学校 1934
- ・ 山口県師範教育の遺産 / 村山英雄編著 1982
- ・ 樫野の流れ / 毎日新聞山口支局編 山口大学教育学部同窓会 1983
- ・ 日本獣医学教育史 / 篠永紫門著 1971
- ・ 山口県立山口農業高等学校百年史：開校百周年記念 / 山口県立山口農業高等学校同窓会 1987
- ・ 小郡町史 / 小郡町 1976
- ・ 田布施農高30年史 / 山口県立田布施農業高等学校 1969
- ・ 山口獣医専・山口大学獣医学科発祥の地記念碑建立顛末、余話 / 山縣宏 2001
- ・ 青春の学舎に思いをはせて-樫水流れて半世紀-：旧制山口獣医専二期卒業五十周年記念誌 / 旧制獣医専二期樫野会 1998
- ・ 角笛：山口獣医畜産専門学校第4回卒業五十周年記念誌 / 山口獣医専第四回卒業角笛会 2000

- ・ 山口大学工学部五十年 / 山口大学工学部創立五十周年記念事業会記念史部会編 1990
- ・ 常盤台今昔：山口大学工学部創立 65 周年記念 / 梶返昭二編著 常盤工業会 2005
- ・ 久原房之助 / 久原房之助翁伝記編纂会 1970
- ・ 萩市史 / 萩市史編纂委員会編 1983
- ・ 山口大学医学部創立三十周年記念誌 / 山口大学医学部創立30周年記念事業委員会 1975
- ・ 山口大学医学部創立50周年記念誌 / 山口大学医学部創立50周年記念事業会 1995
- ・ 霜仁会歴史誌：山口大学医学部創立五十周年記念 / 霜仁会 1994
- ・ 素行渡邊祐策翁 / 弓削達勝編著 1936
- ・ 山口県医学教育小史(3) 幻の宇部医学専門学校 吉井善作・栗屋和彦 山口医学 33(5), 397-407, 1984
- ・ 山口県医師会史 / 山口県医師会 1964
- ・ 防長医学史 / 田中助一著 聚海書林 1984
- ・ 神風特攻隊の出撃 / 高木俊朗著 1995 (「戦争と平和」子ども文学館 13)

#### 山口県文書館所蔵

- ・ 皇国実業修身書 巻1 1940

#### 山口県立山口図書館所蔵

- ・ 高木式六法術断食体験録 1937
- ・ 青史：山口県師範学校卒業同期会記念誌(昭和14年3月) / 鴻友会 1983
- ・ 光被：山口師範学校卒業50周年記念誌(昭和4年3月) / 山口師範学校昭四会 1978
- ・ 山口縣室積師範学校生徒心得一斑 / 山口縣室積師範学校 1917



旧山高生 湯田温泉にて（昭和 15 年頃）



旧山高生 グラウンドにて（昭和 15 年頃）



旧山高生（昭和 15 年頃）



山口師範学校女子部の学生（大正5年頃）



山口高商の学生 亀山の石段にて（昭和16年）

創基 200 周年

## 山口大学の来た道 3

—山口高等商業学校から専門学校誕生まで—

---

2013 年 発行 山口大学



現在の亀山公園（山口市亀山町）



「志」つなぎ 伝える 二百年